



# 国際子ども図書館 の窓

子どもの本は  
世界をつなぎ、  
未来を拓く!

第13号  
2013.9

表紙デザイン：熊谷 博人氏

【写真 国際子ども図書館の活動 平成24年4月～平成25年3月】



講演会「読者としての子どもたち  
—発達と読書、読書の発達—」  
講師：秋田喜代美氏（右）、  
宮川健郎氏（左）  
（平成24年5月12日） p.65

日本ペンクラブ共催講演会  
「いま、アフリカの子ども  
の本は？」  
講師：さくまゆみこ氏  
（平成24年6月30日）  
p.66



科学あそび2012  
講師：坂口美佳子氏  
（平成24年7月28日・29日）  
p.69



展示会「世界のバリアフリー絵本展—  
国際児童図書評議会2011年推薦図書展」  
(平成24年7月31日～8月26日)

p. 72



講演会「天沢退二郎さんに聞く—21世紀の  
宮沢賢治—」  
講師：天沢退二郎氏(右)、宮川健郎氏(左)  
(平成24年10月6日) p. 72



児童文学連続講座  
 (平成24年11月5日～11月6日)

p.65



展示会「セント・ニコラス：  
 世界の子どもたちが集った雑誌」  
 (平成24年12月4日～平成25年2月3日)

p.43～45、p.72



講演会「中国の子どもの読書  
—作家・彭懿氏が語る現在」  
講師：彭懿氏（左）  
通訳：周龍梅氏（右）  
（平成24年12月1日） p.66

講演会「東日本大震災と子ども  
の読書を考える」  
講師：右から河西由美子氏、  
村山隆雄氏、松岡享子氏  
（平成25年3月2日）  
p.40～42、p.66



東京・春・音楽祭共催  
子どものための絵本と音楽の会  
「はろるとまほうのくにへ」  
（平成25年3月24日） p.56～58、p.70

## はじめに



小誌は、国際子ども図書館開館以来毎年刊行されております。号数は館の歩みの年数でもあります。第13号は、平成24年度の館の活動を顧みしました。

当館の東京藝術大学側、北西の敷地では、増築棟の建設工事が行われています。掘削工事が終わり、躯体工事が始まっています。工事の着実な進展に、国際子ども図書館が、様々な方々の御指導を仰ぎつつ、「思春期」まで成長してきた道程を考え併せる昨今です。

平成24年度は、東京文化会館と子どものための音楽会を共催したり、上野の山文化ゾーンフェスティバルに積極的に参加するなど、近隣組織との連携を深めたほか、講演会も複数開催しました。「東日本大震災と子どもの読書を考える」を始め、各種講演会には多くの方々が参加してくださいました。

展示会は、「日本の子どもの文学」、「世界のバリアフリー絵本展」（日本国際児童図書評議会との共催）、『セント・ニコラス』の現物展示のほか、「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより」の電子展示会を作成しました。イングラムコレクションはインターネットで閲覧することができます。

また、日々の活動に加え、増築棟竣工、既存棟改修が成った平成27年度から展開する新規サービスの具体的な検討も開始しました。サービスの目玉として、中高生を対象にした「調べものの部屋」があります。このモデルライブラリーの蔵書構築のための調査プロジェクトを昨年度から開始しています。

今年度も、展示会、講演会に、そしてインターネットを通じた情報発信に力を入れていきたいと思っております。そして、来たる平成27年度の飛躍を期して、有識者の方々、様々な組織との連携を深めていきたいと思っております。一層の御支援を賜りますようお願いいたします。

少しでも多くの方々が、当館を訪れてくださいますのを、上野の山でお待ち申し上げます。

平成25年9月

国立国会図書館国際子ども図書館長 坂田 和光



**【口 絵】**

**【はじめに】** =坂田 和光 1

**【調査・研究報告】**

児童サービス協力フォーラムの3年間 =堀川 照代 3

近年のイギリスの児童書：クロスオーバー現象とダークファンタジー  
=笹田 裕子 8

ウルドゥー語児童書の歴史と現状 =村上 明香 17

外国の児童書に描かれた日本—外国書担当の驚き =酒井 貴美子 27

**【コラム】**

『子どもの本は世界の架け橋』—ミュンヘン国際児童図書館研修報告—  
=中野 怜奈 38

**【ハイライト】**

講演会「東日本大震災と子どもの読書を考える」 =企画協力課協力係 40

「セント・ニコラス：世界の子どもたちが集った雑誌」展 =西尾 初紀 43

10周年を迎えた学校図書館セット貸出し =高宮 光江 46

**【国際交流】**

第78回国際図書館連盟（IFLA）年次大会参加報告 =飛田 由美 49

第33回 IBBY 世界大会に参加して =坂田 和光 52

外国からのおもな来訪者 =企画協力課協力係 55

**【コラム】**

連携イベントで広がる世界 =浜田 久美子 56

**【平成24年4月から平成25年3月までのできごと】** 59

**【活動報告】** 61

**【数字で見る！国際子ども図書館】** 77

**【国際子ども図書館利用案内】** 81

# 児童サービス協力フォーラムの3年間

## 堀川 照代

### 1. はじめに

国際子ども図書館では、平成14年度から「国際子ども図書館連絡会議」を開催して15前後の機関から意見を聴取しており、さらに平成19～21年度には都道府県立図書館9館と「児童サービス連絡会」を開いて、児童サービスの現状・課題を探ってきた。

これらを踏まえて、平成22～24年度の3年間に、「児童サービス協力フォーラム」が開催された。筆者が、この協力フォーラムのコーディネーターをさせていただくことになり、初回の打合せに国際子ども図書館を訪れたのは、平成22年3月のことであった。それから平成25年3月に第3回児童サービス協力フォーラムが終了するまでの3年間について、ここに報告させていただく。

### 2. 「児童サービス連絡会」から「児童サービス協力フォーラム」へ

第1回児童サービス連絡会の報告のなかに、この連絡会の目的が以下のよう  
に4点掲げられている。①都道府県立図書館における児童サービス活動の現状  
及び課題を把握し、情報の共有を図ること、②都道府県立図書館と国際子ども  
図書館との連携の強化を図ること、③連絡会での討議内容を公表することによ  
り、全都道府県立図書館の児童サービスに係る図書館活動を支援すること、④  
国際子ども図書館における子ども読書活動推進支援計画策定に資すること<sup>1</sup>。

この連絡会は都道府県立図書館9館が参加して開催されたもので、3年間の  
テーマは次のとおりであった。「児童サービスの実際と課題（選書、催物、子  
ども向けホームページ等）」（平成19年度）、「学校図書館への支援の実際と課題  
（協力貸出し、レファレンス、学校司書等への研修等）」（平成20年度）、「公共  
図書館への支援の実際と課題（図書館員研修、ボランティア研修、協力レファ  
レンス、移動展示会、資料選定支援等）」（平成21年度）。

---

<sup>1</sup> 「平成19年度児童サービス連絡会：児童サービスの実際と課題」『国際子ども図書館の窓』  
no.8 2008 p.11

各回とも事前アンケートが実施され、それに基づいて連絡会が3時間半かけて開催された。その連絡会の概要については毎年『国際子ども図書館の窓』に報告されているほか、事前アンケートの集計結果がウェブ上で公開され、詳細な情報が提供されている。

そして平成22年度からは、この連絡会の成果を踏まえて、より幅広い児童サービス関係者間の連携協力を促進するために児童サービス協力フォーラムが実施されることとなり、連絡会の討議内容に基づいて、各回のフォーラムのテーマが決定されたのである。

### 3. 児童サービス協力フォーラムの3年間の概要

#### (1) 平成22年度「児童サービス研修のいまとこれから」

協力フォーラムは平成23年3月14日に開催予定であったが、東日本大震災のために中止となった。予定では、①福島県立図書館、②東京都立多摩図書館、③岐阜県立図書館の各館における研修事例と、④さいたま市立東浦和図書館の研修事例及び県立図書館との役割分担、⑤国際子ども図書館から事前アンケート調査結果を発表の予定であった。実際には、3月開催の代わりに、規模を縮小して10月に報告会という形で、20名弱の参加を得て2時間で開催された。少人数の良さを生かし、ワークショップ形式を試みた。

このフォーラムの準備として、アンケートフォームの設計から、アンケート結果のまとめ方、分析方法などをメールでやり取りしたり、実際に会って検討したりした。様々な課題について議論する時間は楽しく、いつも3時間の打合せ時間があったという間に過ぎて行った。このアンケート調査の結果は、研修内容と研修対象から分析し、類型化した上で、後述のように冊子として刊行された。

#### (2) 平成23年度「公共図書館による学校・学校図書館に対する学習支援」

平成24年3月12日開催。第1部の発表は、①鳥取県立図書館における教職員・生徒向けセミナー、学校司書向け研修について、②大阪府立中央図書館の学校支援、③座間市立図書館における自由研究応援講座について：読書環境の整備

と学校・学校図書館との連携、④学校図書館との連携による学習支援プロジェクトについて：図書館員の視点・教員の視点（国際子ども図書館）の4件。

第2部はコメンテーター3名（鎌田和宏氏・帝京大学文学部、小石都志子氏・東京都大田区立大森東中学校、中村伸子氏・千葉県袖ヶ浦市学校図書館支援センター）によるディスカッションとフロアとの交流であった。平成22～23年度に「学校図書館との連携による学習支援プロジェクト」が鎌田氏を主査として進行しており、そのプロジェクトとドッキングした形のフォーラムであった。

### （3）平成24年度「ウェブを活用した情報発信：子どもの読書活動の推進に向けて」

平成25年3月4日開催。第1部では、①東京都立図書館における子どもの読書に関わるウェブでの情報発信、②『子ども読書県しまね』ウェブを用いた情報発信、③子どもナレーター事業とデジタル絵本：『デジタル岡山大百科』の子ども向けコンテンツ、④国際子ども図書館の情報発信、の四つの事例発表があった。第2部は、事前アンケート結果から抽出した四つのテーマ、すなわち「学校・学校図書館支援のための情報提供」「読書案内のための情報提供」「中高生向け情報提供」「都道府県全域における子ども読書推進に向けた情報提供」について11のグループに分かれてディスカッションした。フォーラム閉会後も自由に懇談できる場として会場を1時間確保しておいたが、ほとんどの参加者が残り、ディスカッションの円陣そのままの形で継続したグループもあった。参加者の感想には、このディスカッションの情報交換・交流の意義の大きさについて述べられたものが目立った。



フォーラムは、各回70～80名の参加を得て多くの公共図書館の休館日である月曜日の午後の3時間にわたって実施されたもので、児童サービス連絡会の時と同様に事前アンケートが実施され、それに基づいて発表や討議がなされた。平成23年10月の報告会ではワークショップ形式、平成24年3月のフォーラムではシンポジウム形式、平成25年3月にはグループディスカッションと方法も多様であった。

## 4. 児童サービス協力フォーラムの意義と成果

### (1) 情報交流の場

児童サービス連絡会において、参加者から情報交流の機会の充実が求められたが、3回の協力フォーラムにおいても、同様の要望が見られた。とくに県立図書館からの参加の方々にはその思いが強く、他館の実践の工夫が参考になったという感想が多かった。県立図書館からは、都内の図書館見学を自主研修として組み込んで来る方も多く、参加して得たことを県内市町村立図書館に伝える役割を強く認識していることが感じられた。また、平成24年度にはフォーラムへの参加を館の研修と位置付けて、7名が参加された市立図書館もあった。休館日である月曜日に設定したことも好評であった。このように参加することで様々なものを持ち帰っていただけたのは有り難いことであった。

### (2) ウェブによる情報の発信

児童サービス連絡会の時から事前アンケートの集計結果や討議内容が『国際子ども図書館の窓』やウェブによって公表されてきた。児童サービス協力フォーラムにおいても、当日の配布資料や発表資料、事前アンケート調査をまとめた冊子などがウェブ上に掲載されている。これらはかなりの量の価値ある情報である。丹念に見て行くと、いろいろなヒントが見出せるはずであるが、どれほど利用されているのか把握できないところがもどかしい。

### (3) 研究機能

情報はそのままでも価値があるが、加工編集されると付加価値が出てくる。平成25年3月のフォーラムについて、「冒頭のアンケート分析による課題の整理によって、参加者は各館の規模や状況の差異を超えて、共通の基盤に立って事例発表やグループ討議に向かうことができた。」<sup>2</sup>と参加者の米谷優子氏が報告している。国際子ども図書館には、現状を把握するだけでなく、それを分析・統合して還元することが求められる。

---

<sup>2</sup> 米谷優子「子どもの読書活動の推進に向けたウェブでの情報発信<報告>」カレントアウェネス-E no.234 2013.03.28. E1414 <http://current.ndl.go.jp/e1414> (accessed 2013.6.6)

第1回協力フォーラムのためのアンケート調査をまとめたものが、「国際子ども図書館調査研究シリーズ」の第1号『児童サービス研修のいまとこれから』として平成23年9月に刊行され、翌平成24年には前述のプロジェクトの成果が『図書館による授業支援サービスの可能性：小中学校社会科での3つの実践研究』にまとめられて研究シリーズ第2号として刊行された。

これまでも「児童文学連続講座」の講義録が冊子として刊行されウェブ上にも掲載されているが、これは児童資料に関して講師に依頼して行った講座を中心としている。一方、上述した研究シリーズの2冊は、児童サービスの実践に関して国際子ども図書館職員が行った「調査研究報告書」である。平成24～25年度には「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」が立教大学の中村百合子氏の主査により実施されており、その報告書が刊行されることが期待されるが、国際子ども図書館の児童サービスに関する研究機能が、このような形で刊行されることによって目に見えるようになったと言える。

#### (4) 我が国の児童サービスの拠点

国際子ども図書館は、これまでも我が国の児童サービスの拠点としての役割を果たしてきたが、「児童サービス協力フォーラム」の開催によって、「情報交流」「ウェブによる情報発信」「研究機能」に係る議論が深まり、我が国の児童サービスの拠点としてのリーダーシップがさらに高められたと言える。平成24年度の県立図書館への事前アンケートの自由記述欄には、予算削減の折から、ある館では「児童への直接サービス廃止」の議論があったことが報告されていた。こうした問題にも力強く対応できるよう、国際子ども図書館は、実践を重ね、理論を深めていくことが期待される。

## 5. おわりに

平成25年度からは、子ども読書推進に関してまた新たな装いの企画がなされるという。平成19年度から3年ごとに果敢なる挑戦を続けている国際子ども図書館の方々に、心からエールを送りたいと思う。

(ほりかわ てるよ 青山学院女子短期大学教授)

# 近年のイギリスの児童書： クロスオーバー現象とダークファンタジー

笹田 裕子

## はじめに

英米の主な児童文学賞といえば、アメリカ最大の児童文学賞であるニューベリー賞(The Newbery Medal；1922年創設)と、イギリスの児童文学賞 CILIP カーネギー賞(The CILIP Carnegie Medal；1936年創設)が挙げられる。ニューベリー賞は、前年に出版された「アメリカ児童文学に最も貢献した優れた作品」に授与され、カーネギー賞は前年にイギリスで出版され英語で書かれた「子どものための(2001年「子どもと若者のための」に変更)本のうち際立って優れた作品(1940年代より「前年の最良の本」に変更)」を対象としている。

また、英米絵本賞で主要なものは、アメリカのコールデコット賞(The Caldecott Medal；1937年創設)とイギリスの CILIP ケイト・グリーンナウエイ賞(The CILIP Kate Greenaway Medal)である。いずれも、ヴィクトリア朝三大絵本作家のうち二人の名が付けられた賞だが、前者はランドルフ・コールデコット(Randolph Caldecott, 1846-86)、後者はケイト・グリーンナウエイ(Kate Greenaway, 1846-1901)にちなむ。コールデコット賞は、前年にアメリカで出版された子ども向け絵本のうち最も優れた作品に対してアメリカ図書館協会から授与され、ケイト・グリーンナウエイ賞は、前年にイギリスで出版された本のうち、「イラストレーションの点で最も優れた子どもの本のための作品」にイギリス図書館協会(現 CILIP = the Chartered Institute of Library and Information Professionals：図書館・情報専門家協会)から授与される。

言うまでもなく、受賞作品が必ずしも多くの読者を獲得するとは限らないし、後世に残る名著となり得ない場合も多々あるものの、賞の対象となる作品には興味深いものも少なくなく、その作品が生まれた時代の傾向を知る目安となるのは確かである。そこで、上記のいわゆる4大児童文学賞を補完する目的で創設された文学賞や異なる視点からの賞なども視野に入れながら、イギリス作家による作品に焦点を当て、近年の児童書を概観する。

## クロスオーバー現象

「クロスオーバー現象」とは、大人が子どもの本を好んで読むという現象のことである。近年このクロスオーバー現象を引き起こす要因となったのが、イギリスの作家 J・K・ローリング (Joanne Kathleen Rowling, 1965-) の7



図1：「9 3/4番線」の標示の下にホームへ向かいつつあるカートを再現 (ロンドンのキングズクロス駅)

冊の〈ハリー・ポッター〉シリーズであることから、クロスオーバー現象は別名「ハリー・ポッター効果」とも呼ばれる。このシリーズは、両親を強大な魔法使いヴォルデモートに殺され一人だけ「生き残った男の子」(the boy who lived) である天才魔法使いハリーを主人公にしたファンタジーで、ハリーが11歳から18歳まで魔法界の「hogwarts魔法魔術学校」の生徒として過ごす7年間を描き、1997年出版の第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*) に始まり、2007

年に最終巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*) で完結した。

興行が大成功した映画化作品との相乗効果で、ハリー・ポッターは近年のイギリス児童文学を語る上で外すことができない作品となった。hogwartsの生徒がマグル(「非魔法族」を意味するローリングの造語)の世界と学校とを行き来する手段である「hogwarts急行」の発着ホーム「9 3/4番線」がロンドンに実在する鉄道の駅だということのみならず、この作品の随所に織り込まれたイギリスを連想させる要素に惹かれる読者は少なくない。

かくして、このシリーズに子どもだけでなく大人も魅了された結果、子どもの本と大人の本との境界線が曖昧となる。児童書はファンタジーと併せて突如として人気の高いジャンルとなり、広範にわたる年齢層の読者を獲得することができる「クロスオーバー本」が大流行し、読者の年齢を問わず読みごたえのある作品が出現するようになる。

例えば、〈ハリー・ポッター〉シリーズとほぼ同時期に出版された、イギリスの作家フィリップ・プルマン (Philip Pullman, 1946-) の『黄金の羅針盤』

(*Northern Lights*, 1995) に始まる〈ライラの冒険〉三部作は、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の『失樂園』(*Paradise Lost*, 1667) のモチーフを採り入れた壮大なスケールのファンタジーが、パラレルワールドを舞台に展開される。主人公の少女ライラが住む世界では、一人につき一体の「ダイモン」



図2：映画公開時に販売された、ライラが読み解く「真理計」(黄金の羅針盤)のレプリカ

が常に人間の傍らにいる。動物、鳥、虫などの姿をしたダイモンは、いわば分身あるいはむき出しの状態の可視の魂のようなもので、その人間と生死を共にする。この三部作において重要な「ダスト」という謎の物質(ライラの世界の旧約聖書「創世記」には反復して登場する)は、ダイモンと深い関わりを持つことが示唆される。真実を知ることができる「真理計」を読み解く天賦の才に恵まれたライラは、やがてパラレルワールド間を行き来するために必要な窓を切り開く剣を使う少年ウィルと出逢い、二人は新世界のアダムとイヴとなる。

「ハリー・ポッター効果」は文学賞とも多大な関わりがあった。〈ハリー・ポッター〉シリーズは第1巻と第3巻が文学的価値が高い作品が選ばれることで知られるガーディアン賞 (Guardian Children's Fiction Prize ; 1967年以降年に1度、イギリスまたはイギリス連邦の作家による「子どものための傑出したフィクション作品」に授与される) の最終候補作品リストに挙げられたのをはじめ、第1巻～第4巻までは数々の児童文学賞を受賞したが、この作品の評価はある賞の方針をも変えてしまう。1972年以降児童書部門を設けながらも、児童書を最優秀賞の対象とすることのなかった書籍販売会のウィットブレッド賞 (Whitbread Children's Book Award ; 現コスト賞) は、1998年以降は「ハリー・ポッター効果」の影響で方針を変更し、〈ライラの冒険〉三部作最終巻『琥珀の望遠鏡』(*The Amber Spyglass*, 2000) に最優秀賞を授与したので

ある。

両作品は、〈ライラの冒険〉三部作が最終巻で改めて高い評価を受けたのに対し、〈ハリー・ポッター〉シリーズは5巻以降どの文学賞にもリストアップさえされなかったという相違点はあるものの、共に決して難易度が低くない内容である。それにもかかわらず、読者の年齢差のみならず、本を読む者と読まない者の差異をも縮めるために、この2作品が大きく寄与したことは確かである。通例分厚いハードカバーを読むことなど稀であった10代の男子までもが、この二つの大作には夢中になった。

### ダークファンタジーへの傾斜

クロスオーバー現象に加え、多文化へ視点が向けられるようになったことによる作品の多様化と、ダークファンタジーへの傾斜が、この10年間の児童書の特徴である。

前述の2大ファンタジーにしても、決して明るい内容の作品であるとはいえない。〈ライラの冒険〉三部作は、もともと C・S・ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) の〈ナルニア国ものがたり〉( *The Chronicles of Narnia*, 1950-1957 ) への挑戦として書かれ、反キリスト教という重い主題を扱っている。また、全てを喪失した孤児ハリーを主人公とする〈ハリー・ポッター〉シリーズも、ホグワーツ入学以降、親友や素晴らしい師を得て学校がハリーにとっての疑似家庭となるにもかかわらず、巻を追うごとに主人公を取り巻く重要な人物が次々に命を落とし、次第に内容が暗くなっていく。

ダークファンタジー流行のきっかけとなった作品は、幼少時に家族で移り住んだアイルランドで育ったイギリス生まれの作家ダレン・シャン (Darren Shan, 1972-) による〈ダレン・シャン〉シリーズ12冊 ( *The Saga of Darren Shan*, 2000-2004 ) である。〈ダレン・シャン〉シリーズは、この作品よりも後に映画と併せて大ヒットした、アメリカ人作家ステファニー・メイヤー (Stephenie Meyer, 1973-) の全4巻の〈トワイライト〉シリーズ ( *The Twilight Saga*, 2005-2008 ) と同様、吸血鬼を題材とするダークファンタジーだが、いずれも児童文学賞の対象とはなっていない。

また、近未来を舞台に少年少女による生き残りゲームを描くスーザン・コリンズ(Suzanne Collins, 1962-)の〈ハンガー・ゲーム〉シリーズ(*The Hunger Games Trilogy*, 2008-2010)は、2012年に公開された映画の影響で、第1巻出版4年後になってにわかに関注を集めるようになる。この三部作はステイヴン・キング(Stephen King, 1947-)に絶賛され、全米では売り上げ累計5,000万部を越えるベストセラーとなるが、やはりどの児童文学賞にもリストアップされていない。

だが近年、児童文学賞にリストアップされるダークファンタジー作品も登場する。人間ではない存在を通して描かれるヒューマニズムが、その大きな特色であると言えよう。

コミックとしては初の世界幻想文学大賞を受賞したアメリカンコミック「サンドマン」の原作者として知られるニール・ゲイマン(Neil Gaiman, 1960-)は、イギリスで生まれ育った作家である。ゲイマンの『墓場の少年：ノーボディ・オーエンズの奇妙な生活』(*The Graveyard Book*, 2008)は、2009年にニューベリー賞、2010年にカーネギー賞を受賞した。赤ん坊の頃家族を殺されたノーボディ・オーエンズ(通称ボッド)は、墓場で幽霊夫妻や生者でも死者でもない男に育てられ、人間にはない能力を持つ少年に育つ。ラドヤード・キプリング(Rudyard Kipling, 1865-1936)の『ジャングルブック』(*The Jungle Book*, 1894)に着想を得たというこの作品は、ボッドの成長を追うと同時に、ジャングルではなく墓場という異世界で、一人きりで放置された赤ん坊を保護せずにはいられない〈他者〉たちを、人間よりもはるかに人間味にあふれた存在として描き出す。

さらに、2004年「児童とヤングアダルトのための優秀な文学」作品として、ボストングローブ・ホーンブック賞(*The Boston Globe-Horn Book Awards* ; 『ホーンブック』誌が新聞社ボストングローブと共同で1967年創設)オナー

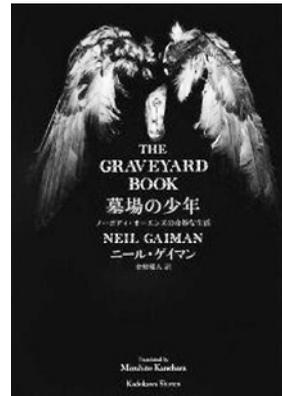


図3：ニール・ゲイマン著、金原瑞人訳『墓場の少年：ノーボディ・オーエンズの奇妙な生活』(角川書店)

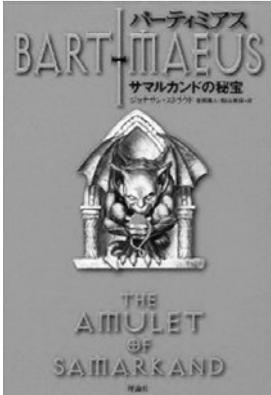


図4：ジョナサン・ストラウド著、金原瑞人・松山美保訳『バーティミアス：サマルカンドの秘宝』（理論社）

（次点）作品となったジョナサン・ストラウド（Jonathan Stroud, 1973-）の作品『バーティミアス：サマルカンドの秘宝』（*The Amulet of Samarkand*, 2003）に始まる〈バーティミアス〉三部作、及び2012年度コスタ賞にリストアップされた番外編『ソロモンの指環』（*The Ring of Solomon*, 2010）の4冊は、太古から人間と関わってきた魔神が主人公という一見ダークヒーローものである。三部作では、架空のロンドンを舞台に世界の支配者である魔法使いが、魔法の力を使って呼び出すことで主従関係を結ぶことができる魔神をはじめとする妖霊を酷使する様子や、魔法使いと一般人という力の差を反映する階級差による人間同士の差別意識などを、魔神の視点から浮き彫りにする。さらに、この三部作は、天才魔法使いナサニエルと、生来魔法に対抗できる特殊能力を持つ一般人キティという少年少女の成長を描くと同時に、階級の異なる人間同士のみならず、人間と妖霊という異種族間にも、信頼関係が成立し得ることを主題の一つとしている。

### 独自の世界観を提示する作家たち

近年、隆盛を極め多様な作品が出尽くした感のあるファンタジーというジャンルにも、まだ新しさや独自性を有する作品が出現し得るという、さらなる可能性を示唆する作家が登場する。

2010年に国際アンデルセン賞を受賞したデイヴィッド・アーモンド（David Almond, 1951-）は、初めて書いた小説『肩胛骨は翼のなごり』（*Skellig*, 1998）でカーネギー賞



図5：デイヴィッド・アーモンド著山田順子訳『肩胛骨は翼のなごり』東京創元社、人形制作 Bee KANNO、カバー写真 NEXT（杉浦敏男・小濱麗子）、カバーデザイン柳川貴代 +Fragment

とウィットブレッド賞をダブル受賞する。『肩胛骨は翼のなごり』には、「スケリグ」という名の人間かどうか定かではない存在が登場する。スケリグは、主人公マイケルが越してきた家の庭の片隅にある廃屋同然の物置きの中にいるところを見つけた、埃にまみれた痩せた人物で、最初はただの風変りなホームレスのようにしか見えない。しかし、病弱で未熟児の赤ん坊の妹に両親がかかりきりになっていることで不安定になっていたマイケルにとって、やがてスケリグは重要な存在となっていく。作品の随所で、スケリグの翼を持つ者である可能性と、天使または鳥との類似性が示唆されている。マイケルはスケリグの秘密を、隣に住む詩を愛する不登校少女ミナと分かち合うが、2010年出版の『ミナの物語』(*My Name is Mina*)は、この『肩胛骨は翼のなごり』の物語以前のミナを描いた作品である。『ミナの物語』は、2012年度のカーネギー賞ショートリストにリストアップされている。

また、カーネギー賞特別推薦作品となったアーモンドの『闇の底のシルキー』(*Kit's Wilderness*, 1999)では、寂れた炭鉱町に越してきた主人公の少年キットが、同級生の風変りな少年アスキューに誘われるまま、ゲームに参加し「死」を疑似体験する。『ヘヴンアイズ』(*Heaven Eyes*, 2000)はカーネギー賞とウィットブレッド賞の候補に挙がった作品だが、この作品もアーモンドらしい独特な世界観を提示しており、自由を求めて施設を抜け出し旅に出たエリン、ジャンユアリー、マウスの三人の孤児が出遭う、「黒い泥沼」<sup>ブラック・ミッドゥン</sup>で奇妙な老人グランパと暮らす水かきがある少女「ヘヴンアイズ」という不可思議な存在が登場する。2003年ウィットブレッド賞とスマーティーズ賞(現ネスレ・スマーティーズ賞=1992年)を受賞した上にカーネギー賞ショートリストに挙げられた『火を喰らう者たち』(*The Fire-eaters*, 2003)は、1962年の夏、「火喰い術」を得意とする曲芸師マクノルティと出会いアシスタントを頼まれる少年ボビーを描く。キューバ危機を背景に、登場人物の心理描写と自然描写とを繋ぎ合わせることで、神秘的な雰囲気を見事に醸し出している作品である。

アイルランド系イギリス人作家シヴォーン・ダウド(Siobhan Dowd, 1960-2007)もまた、独創性に富む作家である。ダウドは、『ボグ・チャイルド』(*Bog Child*, 2008)で2009年カーネギー賞を受賞した。この作品では、1981年の北

アイルランドを舞台として、主人公の少年ファーガスを中心に、2000年もの間泥炭地で保存されていた遺体（ボグ・ピープル）と、ファーガスの服役中の兄ジョーが活動に携わる IRA 暫定派という、二つの異なる要素が巧みに組み合わせられている。

ダウドは2007年47歳で癌のため逝去したが、ダウドが遺した原稿のうち数作が死後に出版される。そのうちの1冊『怪物はささやく』（*A Monster Calls*, 2011）は、ダウドの遺稿に触発されたパトリック・ネス（Patrick Ness, 1971-）が仕上げたファンタジー作品で、2012年カーネギー賞と併せてケイト・グリーナウエイ賞を受賞した。このダブル受賞は史上初である。物語の流れに沿って適宜挿入された白黒の挿絵が作品全体に果たす役割の重要さが、優れた読み物であると同時に、絵本としても価値が高いとみなされたゆえんであると考えられる。

13歳の少年コナーは、両親が6年前に離婚し、父親は新しい家族とアメリカにいるため、重病の母親と二人で暮らしている。ある時から、真夜中を過ぎると、コナーの前にイチイの木を姿をした怪物が現れるようになる。怪物は三つの物語を語り、第4の物語はコナー自身が語る真実の物語でなければならないと言う。コナーが最初は悪夢だと思っていた怪物の存在は、最後まで曖昧なままである。だが、白黒の挿絵によって怪物の姿は具現化され、その姿が作品全体を通して絵の大部分を占める。物語の進行につれて、次第に怪物の絵は大きくなっていく。恐ろしげで迫り来るような怪物の姿は、まるで孤独と不安に苛まれるコナーの心の中を描出しているかのようであり、作品の最後に初めて明らかにされるコナー自身の真実の悲痛さをも映し出す。

絵が重要な役割を果たす異色作であるという点では、2008年にコールデコット賞を受賞した、総ページ数530ページの中に挿入された300枚を越える白黒の絵から成る、アメリカ人作家ブライアン・セルズニック（Brian Selznick, 1966-）の『ユゴーの不思議な発明』（*The Invention of Hugo Cabret*, 2007）と通じるものがある。

読み物としても絵本としても高い評価を受けた『怪物はささやく』以外で、近年のイギリス絵本では、ローレン・チャイルド（Lauren Child, 1965-）と

エミリー・グラヴェット (Emily Gravett, 1972-) も注目すべき作家である。チャイルドは、一見落書きのようでありながらパソコンを用いたコラージュが挿入されるなど技術を駆使した個性的な絵で知られ、『ぜったいたべないからね』(*I Will Not Ever, Never Eat a Tomato*, 2000) でケイト・グリーナウエイ賞、『ペットになりたいねずみ』(*The Pesky Rat*, 2002) でスマーティーズ賞金賞を受賞した。グラヴェットは、様々な仕掛けが施された絵と意表をつくらすとで知られる『オオカミ』(*Wolves*, 2005) でケイト・グリーナウエイ賞を受賞し、『小さなネズミの大きなコワイもの本 (未訳；仮題)』(*The Little Mouse's Big Book of Fears*, 2007) で2008年に再び同賞を受賞した。その後も、この二人の作家の作品は、次々に賞にリストアップされ続けている。

(ささだ ひろこ 清泉女子大学英語英文学科准教授)

# ウルドゥー語児童書の歴史と現状

村上 明香

## ウルドゥー語の輪郭

ウルドゥー語はパキスタン総人口1億8,071万人<sup>1</sup>の国語に指定されている。母語人口はおよそ1,700万人と総人口のわずか9.4%に過ぎないながら、多言語・多民族によって構成されるパキスタンの国語として、複数民族間の連絡言語（Link Language）の役割を果たしている。そのため、この言語を話すことのできる人口は相当の割合に達すると推測される。さらにインド憲法によって22の指定言語（Scheduled Languages）<sup>2</sup>の一つに定められており、ジャンムー・カシミール、ウッタル・プラデーシュ、ビハールの北部諸州と南部のアーンドラ・プラデーシュ州などを中心に約5,200万人（総人口の約6%）の母語話者を持つ。

ウルドゥー語の発生は、イスラーム教徒が西方からインドへ侵入した11世紀頃に遡る。その当時、デリー周辺で話されていた言葉に支配層の言語であったペルシャ語やトルコ語の語彙が混入し、成立したとされる。デリーを都として栄えたムガル王朝時代（1524-1857）に話し言葉から書き言葉（アラビア文字を採用）へと標準化が進み、文学語として使用され始めたのは18世紀に入ってからのことである。ウルドゥー語は、インド亜大陸の広域な地域に居住する全ての宗教集団の成員によって話されているが、過去約300年、その主たる文学言語として使用してきたイスラーム教徒と密接な関係を維持している。1857年のインド大反乱を経て、イギリスの植民地となったインドであったが、1947年に独立を宣言。インドとパキスタンに分離独立を果たした。パキスタンはイスラーム教を国家統一理念に掲げたため、多くのウルドゥー語母語話者がインドからパキスタンへと移住した。一方、インドでは居住するイスラーム教徒（約1億3,000万人）を中心とした多くの人々の連絡言語、共通語としての役割を

<sup>1</sup> 2011/2012年度パキスタン経済白書に基づく。

<sup>2</sup> 指定言語とはインド憲法第8附則に挙げられた言語。話者人口が多い、ないしは言語的文化的に重要であるとして政府に保護と振興が義務付けられている言語である。

も担っている。なお北インドのヒンディー語とウルドゥー語は姉妹言語で、宗教の差による文字（ヒンディー語はデーヴァナーガリー文字）や語彙（ヒンディー語ではサンスクリット系の単語が多い）など最小限の差異が見られるものの、口語レベルでは意思の疎通に何ら支障はない。「ヒンディー映画」と称される大衆映画がパキスタンで人気を博しているのもそのためである。口語レベルにおけるヒンディー語／ウルドゥー語は、インド・パキスタン両国における共通語としての役割を果たしているといえよう。

### ウルドゥー語児童書の歴史と発展

まず児童書のジャンルの一つとして、民話や昔話が挙げられる。ウルドゥー語の民話・昔話には、『アクバルとビールバル (اکبر بیرل)』、『ムッラー・ドーピヤーザ (ملا نوپیزه)』、『シャイフ・チッリー (شیخ چلی)』といった小咄集がある。『アクバルとビールバル』は、ムガル帝国第3代皇帝アクバルの出す無理難題を臣下ビールバルが頓知で見事に解決したり、皇帝アクバルの目に余る言動をユーモアを交えて諫めるといった頓知譚、滑稽譚である。『ムッラー・ドーピヤーザ』もまた、皇帝アクバルと臣下ムッラー・ドーピヤーザの同様のやり取りを題材としている。『シャイフ・チッリー』は、能天気でおちょこちょいな主人公シャイフ・チッリーの行動をユーモラスに描いた滑稽譚である。これらはいずれも口承で伝えられてきたが、後に児童向けの読みものとして出版された。現在でも様々な類話や版が刊行され、その人気を保持している。

ウルドゥー語の児童文学が創作されるようになったのは、18世紀に入ってからのことである。ウルドゥー語児童文学史上、最初に登場するのが「ナズム（詩の形式の一つ）の父」と称される詩人ナズィール・アクバラバーディー (نظیر اکبر آبادی, 1735-1830) だ。道徳や教訓、インドの様々な宗教行事、動物をテーマとした作品が多く、後に『子どものためのナズィール・アクバラバーディー (نظیر اکبر آبادی بچوں کے)』と題された詩集が出版されている。ウルドゥー児童文学の発展に大きく貢献したとされるのが、詩人ムハンマド・イスマール・メーラティー (محمد اسماعیل میرٹھی, 1844-1917) である。イスマールは子どもたちのウルドゥー語教材の充実を図るため、詩や物語を精力的に執

筆した。これらの作品は100年以上たった今でもインド・パキスタンのウルドゥー語教科書に見ることができる。散文では、ナズィール・アフマド(نذیر احمد, 1830-1912)の長編小説『花嫁の鏡 (مرآة العروس)』(1869年初刊)が最初の作品とされている。もともと自分の娘たちの教育用に執筆されたこの作品は、若い娘たちが生きてゆく中で必要な技能や心構えを有能な妹と無能な姉の結婚生活の様子を通して描き出したもので、刊行からわずか20年のうちに10万部を売り上げるウルドゥー語初のベストセラー本となった。この作品は、ウルドゥー文学史上初の近代文学としても有名である。このように、初期のウルドゥー語児童文学は教育や道徳と深い関わりを持っていたことが分かる。この伝統は現在も受け継がれている。

ウルドゥー語児童文学普及の上で重要な役割を担ったのが、1894年にラホール(パキスタンの文化都市)に創業した出版社フィローズサンズ(Ferozsons)である。フィローズサンズはウルドゥー語児童書の老舗で、現在でも児童書を語る上で欠かせない存在である。国際子ども図書館のウルドゥー語蔵書にも、この出版社のものが多数含まれている。創業者のマウルヴィー・フィーローズブディーン(مولوی فیروز الدین)は商売目的だけでなく、当時総人口の5.4%にしか満たなかった大衆の識字率向上を図るために、児童図書の出版に力を注いだ。その代表として、月刊児童雑誌『教育としつけ(تعلیم و تربیت)』がある。この雑誌は現在も同出版社から刊行されている。

ウルドゥー語の児童図書が一般に普及したのは近年のことで、『教育としつけ』のような児童向けの定期刊行物が流通の中心を担っていたことも、ウルドゥー語児童書の特徴と言えよう。1909年には同じくラホールから週刊児童雑誌『花(بہول)』が刊行された。『花』はウルドゥー語初の女性小説家ムハンマディー・ベーガム(محمدی بیگم, 1878-1908)が創刊した雑誌である。「子どもにお話をせがまれる母親たちに、良い材料を提供できないものか」という思いから作られたこの雑誌は、創刊と共に大好評を博した。編集や投稿者には当時ウルドゥー語文学界で活躍していた著名な作家や詩人たちがその名を連ね、ウルドゥー語の児童文学史上、必ず言及される記念碑的な雑誌と評されている。

『教育としつけ』や『花』といった児童雑誌の創刊は、それまで発表の場がな

かった児童文学作品に大きな場を提供した。その結果、子ども向けの物語や詩、戯曲などを執筆する作家が増え、豊富な作品が生み出されることとなった。同種の雑誌はインド・パキスタンの各地から多数刊行された。その代表として、インドの都市デリーから創刊された『おもちゃ (كھلونا)』やパキスタンの都市カラチから創刊された『ハムダルド薬局の若木 (بمرد نونہال)』が挙げられる。こうした雑誌によって、ウルドゥー語児童文学はその黄金期を迎えたと言われている。

一種の黄金期を迎えたウルドゥー語児童文学であったが、1960年代以降、その勢いは徐々に下火になっていった。『花』も1957年に廃刊となった。ウルドゥー語児童文学の衰退と現状については、昨年、英国放送協会 (BBC) が運営するウルドゥー語のインターネットニュースサイト、BBC Urdu に寄せられた書評によく表れている。この書評は、パキスタンの国立機関 Pakistan Academy of Letters 発行の機関誌『文芸 (ادبیات)』の児童文学特集に対する書評である。以下に、その一部を紹介したい。

「パキスタンには、児童向けの雑誌や図書が次々に出版され、それらを読むことに熱中していた時代があった。特に中産階級の家庭の中には毎月、児童向け雑誌が一冊も届かない家など一軒もなかったのではないだろうか。しかし、70年代から80年代にかけて児童向け雑誌の廃刊が相次ぎ、それに伴って図書も出版されなくなっていった。児童向け雑誌や図書は、今日では書店や新聞・雑誌を売る店に置かれてすらいない。置かれていたとしても、その数はごくわずかだ。大都市の大きな書店やショッピングモールには、非常に素晴らしい印刷が施された高価な英語の児童書が必ず置かれている。しかし、ウルドゥー語やその他の地域言語で書かれた本を目にすることは少ない。この状況は変わりつつあるパキスタンの社会状況を映し出している。そしてここから、今後の未来が予測できる。英語が普及することは決して悪いことではない。しかし、そのせいでウルドゥー語やその他の地域言語への関心が逸れてしまうのは、何にせよ良いことではない。」<sup>3</sup>

---

<sup>3</sup> [http://www.bbc.co.uk/urdu/entertainment/2012/07/120729\\_book\\_review\\_children\\_tk.shtml](http://www.bbc.co.uk/urdu/entertainment/2012/07/120729_book_review_children_tk.shtml) から筆者が意訳。(accessed 2013.9.9)

この記事は、ウルドゥー語児童文学がいかに厳しい状況に置かれているのかを物語っている。ウルドゥー語以外の地域言語の状況は、さらに深刻である。それでは、どうしてこのような状況が生まれたのであろうか。その原因の一つとして、ウルドゥー語への関心が薄れてきていることが挙げられる。パキスタンでは英語を話すことが一種のステータスとみなされており、将来の就職などを見据えて、子どもに英語教育を施そうとする親も多い。同様にインドでもヒンディー語や英語が影響力を増し、ウルドゥー語を読み書きできる若年層人口が減少傾向にある。さらにインドでは1947年の分離独立以降、ウルドゥー語書籍の出版自体が激減している。

その他の原因として、ウルドゥー語・英語の児童文学作家でイラストレーターのルマーナ・フサイン (رمانہ حسین) は、ウルドゥー語児童文学が道徳的なテーマに焦点を当て過ぎてテーマの多様性を欠いていること、イラストの質が悪く児童の関心を欠いてしまったことを挙げている。ウルドゥー語の出版物は、1990年代にコンピューター処理が導入されるまで、筆耕 (カーティブ) の手によって印刷用に清書されていた。『ウルドゥー語における児童文学 (اردو میں بچوں کا ادب)』(1970年刊)の著者、マフムードウツラフマーン (محمود الرحمن) は、英語の本にはカラフルで素晴らしいイラストが描かれ、上質な紙が使用されているのに比べ、ウルドゥー語の児童書に挿入されるイラストはもっぱら絵心を持たない筆耕たちによって描かれていた、ウルドゥー語の児童書もイラストや紙の質に配慮しなければならない、と述べている。児童文学作家に対して十分な敬意や報酬が与えられてこなかったことも、衰退の一因として挙げられよう。こうした複数の要因が重なり、ウルドゥー語の児童文学は衰退を余儀なくされた。1970年代になると、その穴を埋めるべくロシアや中国、ヨーロッパなど諸外国語からの翻訳本が多く出回るようになった。

翻訳の話が出たところで、日本語からウルドゥー語への翻訳 (重訳) 状況について触れておきたい。まず、昔話や童謡の選集が複数刊行されている。有名な日本の民話シリーズとして、パキスタンのジャーナリスト、シャフィーア・アキール (شفیعہ عقیل) 編集の日本民話集がある。同シリーズの近年刊行のものには2008年にパキスタンの商業都市カラチにあるダールル・イシャーアト (Darul

Ishaat) 社より出版された『日本の人気のある物語 (جاپان کی مقبول کہانیاں)』がある。個人作家の作品としては、『マヤの一生』『片耳の大シカ』『金色の川』など、椋鳩十の作品が複数翻訳されている。これらの作品はいずれもパキスタン、ラホールの **Sang-e-Meel Publications** より出版されている。その他、識字教育専門家、寓話作家の田島信二氏による著作『雲の随想録』や『びっくり星の伝説』、黒柳徹子氏の『窓ぎわのトットちゃん』などがある。

## 児童文学の見直し

児童文学の衰退は、ウルドゥー語のみならずインド・パキスタンの他の言語にも共通した問題であった。しかし近年、両国において児童文学への様々な取組が行われ、関心が高まりつつある。その一端を①パキスタンの非政府組織「千夜一夜ブックバス協会」(**Alif Laila Book Bus Society**、以下 **ALBBS**)の活動、②児童文学祭、③児童文学賞の3点から紹介したい。

### ① ALBBS

**ALBBS** は、子どもたちへの教育提供を目的とする非政府組織である。1978年、ラホール市内の公園に **ALBBS** が運営するパキスタン初の児童書貸出図書館 **Book Bus** が創設された。二階建てバスを改造したこの図書館は、アメリカ人心理学者ニータ・ベイカー (**Nita Baker**) が発案、彼女からの寄贈圖書を基に、パキスタン人教育者バサーラト・カーズィム (بصارت كلظم) が設立した。



Book Bus  
(バサーラト・カーズィム女史提供)

この数年後には、パンジャーブ州政府の協力を得て **Book Bus** に隣接するレファレンス図書館が開設された。現在、レファレンス図書館には雑誌やゲーム、パズルが備え付けられ、コピーコーナーなどがあるほか、テレビを使った教育映画の上映も行われている。

1998年には移動図書館「ダースターンゴー (**Dastango**)」(語り部の意) が



「ダースターンゴー」での朗読会（バサーラト・カーズィム女史提供）

導入され、ラホール近郊の町や村の学校を廻って、子どもたちに本を提供している。パキスタンやインドでは、いまだに都市部と農村部に大きな差がある。都市部を離れば、本の入手が困難な地域も珍しくない。児童書の購入できる書店や図書館だけではなく、学校の図書室でさえ不足しているのが現状だ。英語教育を実施している都市部の私立学校の中には、素晴らしい図書室設備を持つ学校がある。しかし公立学校の中には、図書室がある学校は非常に少なく、その数は農村部へ行くほど減少する。

さらに、南アジアには「パルダ」と呼ばれる女性隔離の習慣がある。近年、都市部では女性が外出する姿をよく目にするようになったが、保守的な地域や家庭も多く、女性の行動範囲は男性に比べて非常に制限されている。このような問題を抱える国や地域にとって、移動図書館の役割は非常に大きいと言える。近年、インドやパキスタンでは様々な団体によって各地に「ダースターンゴー」のような移動図書館が導入されつつある。

## ② 児童文学祭

パキスタンでは2011年から国内初の児童文学祭 Children's Literature Festival (CLF) が開催されている。2013年5月24日～25日には、首都イスラマバードにおいて、第6回目のフェスティバルが開催された。第1回から第5回までの来場者数は延べ80,000人に上る。会場では、児童文学者たちによるトークや朗読会、様々な言語による詩の会、人形劇などが催され、物語の創作や本の製作、イラストに挑戦するコーナーも設けられているほか、今年のCLFでは隔月刊児童雑誌『空飛ぶお皿 (اڑن شتری)』が発刊されることが発表された。さらに今後はブックフェアも開催される予定である。活動の詳



児童文学祭の風景

（ファウズィヤ・ミナッラー女史提供）

細については CLF のウェブサイト<sup>4</sup>に掲載されている。

同様の児童文学祭はインドでも開催されている。その一つが、2008年にインド初の児童文学祭として開催されたブックaroo (Bookaroo) である。子どもたちに本を読む楽しさを知ってもらおうと、会場ではお話の朗読会やクイズ、詩の会や本のイラストを書くワークショップなどが行われている。また、この団体は Bookaroo in the City (BIC) というユニークな活動も行っている。これは十分な読書環境の整っていない学校を出張訪問し、朗読会やイラストのワークショップ、児童文学作家との交流を、英語やその他の地域言語で行う活動である。BIC は2012年までに108の学校への訪問活動を行っている。活動の詳細は Bookaroo のウェブサイト<sup>5</sup>に掲載されている。

### ③ 児童文学賞の創設

近年、インド・パキスタンでは複数の児童文学賞が新設された。主な児童文学賞には以下のようなものがある。

まず、インドの国立文学アカデミー (Sahitya Akademi) が2010年に創設した「児童文学賞 (Baal Sahitya Puraskar)」がある。同アカデミーは、英語を含むインド諸言語による文学の研究・発展支援のために設けられた政府の独立機関である。児童文学賞としての歴史は浅いものの、国立の権威ある機関がこのような賞を設けたことで、インドにおける児童文学の今後の発展が期待される。受賞作品は毎年一回発表されており、創設されてから現在まで毎年一作のウルドゥー語作品がこの賞を受賞している。2011年の受賞作品はウルドゥー語詩人アーディル・アスィール・デヘラヴィー (عدلیت اسیر دہلوی) の『アーディル詩全集 (کلیت عدلیت)』であった。アーディルは児童向けの詩を数多く詠んでいるほか、ウルドゥー語純文学作品を児童向けに編集もしている。2012年にはウルドゥー語文学研究者で詩人、作家のマナーズィル・アーシク・ハルガンヴィー (مناظر عاشق پرگنوی) の短編集『しっぺ返し (جیسے کو تیسرا)』が受賞している。アーシクは児童文学の研究も行っており、2002年に前述の国立文学ア

---

<sup>4</sup> <http://childrensliteraturefestival.com/> (accessed 2013.9.9)

<sup>5</sup> <http://bookaroo.in/> (accessed 2013.9.9)

カデミーから研究書『ウルドゥー語における児童文学 (اردو میں بچوں کا ادب)』を出版している。なお、受賞者については同アカデミーのウェブサイト<sup>6</sup>で閲覧することができる。

その他、インドのハリヤーナー州政府が2008年に新たに設けた「児童文学優秀作品賞」がある。主な受賞者には、詩人のハイダル・フマーユーン(حیدر ہمایون)、児童文学研究の第一人者フシュハール・ザイディー(خوشحال زیدی)がいる。その他、各州政府内のウルドゥー・アカデミーが優れた児童文学に対して児童文学賞を授与している。

パキスタンの児童文学賞としては政府出資の内閣府所属法人 **National Book Foundation** の賞が挙げられる。この法人は低価格で入手できる絵入りの児童書を手掛けているほか、地域言語やウルドゥー語への翻訳も行っている。この法人の児童文学賞には、児童文学への貢献が認められた作家に対して与えられる「児童文学振興賞」の他、「カーイデ・アーザム (=偉大なる指導者)、アッラーマ・イクバルそしてパキスタンについて書かれた最優秀児童書に対する大統領賞」がある。この賞は、カーイデ・アーザムの尊称で慕われているパキスタン建国の父、ムハンマド・アリー・ジンナー (محمد علی جناح) や、パキスタンの国民的詩人ムハンマド・イクバル (محمد اقبال)、そしてパキスタンについて書かれた児童書へ贈られる賞である。さらに2008年から「**Write and Win**」という賞金付きの児童文学作品コンクールが開催されている。2013年の入賞作品は、前述の非政府組織 **ALBBS** の創設者バサーラト・カーズィムの『おばあちゃんとわたし (میری دادی اُمّ اور میں)』『おじいちゃんとわたし (دادا ابا اور میں)』であった。

その他、日本と関連する児童書としてパキスタンの児童文学者、社会活動家ファウズィヤ・ミナッラー (فوزیہ من اللہ) の『さだこの祈り (ساداکو کی دعا)』が広島の特定非営利活動法人 **ANT-Hiroshima** から出版されている。国際協力、平和教育活動を行う同法人は『さだこの祈り』の翻訳や普及活動を含む一

<sup>6</sup> <http://sahitya-akademi.gov.in/sahitya-akademi/pdf/bal-sahitya-2011.pdf>  
<http://sahitya-akademi.gov.in/sahitya-akademi/pdf/bal-sahitya-2012.pdf>

※2010年の受賞者は未掲載。(accessed 2013.9.9)

連の国際貢献が認められ、2007年に広島市民賞を受賞している。『さだこの祈り』は広島市の平和記念公園に建つ「原爆の子の像」のモデル、佐々木禎子さんを主人公にした物語である。ウルドゥー語のほか、日本語、ダリー語、パシュトー語、英語などにも翻訳されている。

ファウズィヤのもう一つの代表作に『アマーイー (امائی)』シリーズがある。アマーイーは小さな星々でできた鳥で、流れ星に姿を変えて子どもたちを世界の旅へと誘う。同シリーズは英語とウルドゥー語の両方で出版されているほか、アニメーション化もされている。アニメ版の『アマーイー』は2012年にローマ市主催の **Global Junior Challenge Award**<sup>7</sup>を受賞している。この賞は、科学技術を教育にいかした優れたプロジェクトに与えられる賞である。

パキスタンでは近年、ファウズィヤの作品のように英語とウルドゥー語の二言語で同時に出版されるケースが多くなっている。これまで英語の児童書と比較され、その劣等性を指摘されてきたウルドゥー語の児童書にとって、これは大きな進歩と言える。

以上のように、ウルドゥー語児童書は今まさに再興期を迎えようとしている。ウルドゥー語児童文学が衰退した原因として挙げられていたイラストへの関心も高まり、コンクールや児童文学賞の新設など、児童文学作家の地位も向上している。さらには、児童文学祭のような活動が活発になることで、将来優れた児童文学作家が生まれる可能性も高まるだろう。こうした活動が持続されれば、ウルドゥー語児童書は大いなる躍進を遂げるものと信じてやまない。

(むらかみ あすか ウルドゥー文学研究者)

---

<sup>7</sup> <http://www.gjc.it/2012/en> (accessed 2013.9.9)

# 外国の児童書に描かれた日本—外国書担当の驚き

## 酒井貴美子

### はじめに

国際子ども図書館の外国語図書収集方針の一つに、日本関係図書の収集がある。日本語から外国語に訳された図書、日本を扱った外国出版の図書などがこれにあたる。「外国語に翻訳された日本の児童書」については同名のデータベースがあり簡単に検索でき、日本を扱った外国出版の図書は、書名に「日本」が含まれるものは書名検索ができるが、その他の図書は合理的な検索手段がない。担当者が日常の作業のなかで「あ、こんな本があるんだ」と興味深く眺めるばかりである。以前、資料室の小展示「エキゾチック・ジャパン～日本人が知らない、日本を扱った世界の児童書」「オタク的日本人愛～フランスの児童書に見る日本」<sup>2</sup>などで紹介してみたこともあるが、日本人にとっては驚くものが多い。では、驚く理由とはどのようなものなのか？その理由を挙げながら、それらの本を当館蔵書の中から紹介してみたい。以下、( ) 内に仮訳タイトルを示す。

### 中国？それとも日本？それともどこでもない？

日本を描くというが、アジア以外の国々の本では、中国と日本が同じ東アジアにある隣国同士のためか風景、服装がしばしば混同される傾向にある。

アラビアンナイト「アラジンと魔法のランプ」の舞台は中国（この話の出自にも諸説あるが）で、アラジンは中国の少年ということになっている。しかし、19世紀にイギリスで出版された“*Marcus Ward's Japanese picture stories*”（マーカス・ワードの日本の絵話）<sup>3</sup>には「アラジンと魔法のランプ」が収録されているが、日本の話になっており、しかも挿絵には中国風の登場人物もいれば、日本の着物姿に日本髪のお姫様も侍女もいる。同じく“*The Frog Prince*

<sup>1</sup> <http://rnavi.ndl.go.jp/childbook/honyaku.php>

<sup>2</sup> [http://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/data\\_backnumber.html](http://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/data_backnumber.html)

<sup>3</sup> *Marcus Ward's Japanese picture stories*. London : M. Ward & Co., [1875].

*and other stories*” (蛙の王子 その他の話)<sup>4</sup>に収録されている「アラジンと魔法のランプ」においても侍女は日本髪に日本の着物を着ている。こうした傾向は今日まで続いている。

アンデルセンの「うぐいす」の舞台も中国だが、ブラジルで出た“*O rouxinol e o imperador de Hans*

*Christian Andersen*” (アンデルセンによる皇帝と鶯)<sup>5</sup>には最初のページに日本語で「皇帝の鶯」と書かれている。セルビアの“*Бајке старог Јапана*” (日本むかしばなし)<sup>6</sup>も登場人物は中国風の服装である。この本には龍も登場するが、その龍は背中に翼がある西洋のドラゴンである。

日本と中国の混同もあるが、中国も正確に描かれているわけではない。オランダで2009年に「金の画筆賞」を受賞した“*Het geheim van de keel van de nachtegaal : naar 'De nachtegaal' van H.C. Andersen*” (うぐいすの声の秘密：アンデルセンの「ウグイス」による)<sup>7</sup>は色彩豊かな美しい本だが、登場する人々の服装、髪型など気にしだすと楽しめない。同じアンデルセンの「人魚姫」を描いた“*La petite sirène*” (小さな人魚姫)<sup>8</sup>では、王子は中国の王子になっている。服装は清代の想定だが、判然としない。時代も場所も超えた遠い国の遠い話ととらえれば素直に受け取ることができるのかもしれない。こ



「アラジンと魔法のランプ」  
(マークス・ワードの日本の絵話)

<sup>4</sup> *The Frog Prince and other stories* / by Walter Crane ; introduction by Ruari McLean. New York City : Mayflower Books, 1980. (※原書は1874年出版)

<sup>5</sup> *O rouxinol e o imperador de Hans Christian Andersen* / por Taisa Borges. São Paulo : Peirópolis, c2005.

<sup>6</sup> *Бајке старог Јапана*/превод са јапанског Дејан Разић; превод са руског Љиљана Шијаковић; илустрације Весна Ј. Кнежевић. Београд : Танеси, 2011.

<sup>7</sup> *Het geheim van de keel van de nachtegaal : naar 'De nachtegaal' van H.C. Andersen* / Peter Verhelst ; met prenten van Carll Cneut. Wielsbeke : Eenhoorn, 2009.

<sup>8</sup> *La petite sirène* / Hans Christian Andersen ; [illustrations] Quentin Gréban. Namur : Mijade, c2008.

こまでいけばもういいか、と思うのは、ロシアの人気挿絵画家チャーシキンの“*Японские народные сказки*”（日本民話）<sup>9</sup>である。収録内容も「蟻の殿様の錠」「三角の夢」「かちかち豆」など、日本人には馴染みのない題名が並ぶ。挿絵も中国でも日本でもない不思議な世界が描き出されている。

### 浮世絵の衝撃

日本の浮世絵は印象派の画家にも影響を与えたといわれているが、日本を扱った児童書にも影響を与えている。特に日本民話の挿絵は浮世絵の影響の下に描かれているものが多い。

フランスの“*Le grand-père qui faisait fleurir les arbres*”（花咲爺）<sup>10</sup>で、登場人物の服装は着物ではなくガウンのようになっているが、隣のおじいさんは、写楽の描く市川蝦蔵の演じる竹村定之進なのである。イギリスの“*The shining princess : and other Japanese legends*”（輝くお姫様、その他の日本の伝説）<sup>11</sup>には、鉢巻にふんどし一つで亀の背にまたがるいなせな浦島太郎が出てくるが、これは葛飾北斎の「尾州不二見原」に描かれた職人を連想させる。同じくイギリスの“*Folk tales of Japan*”（日本民話）<sup>12</sup>に登場する素戔嗚尊<sup>すさのおのみこと</sup>は、どう見ても助六である。アメリカの“*The crane wife*”（鶴妻）<sup>13</sup>では鶴を助けた若者のところに、鶴が変身した若い娘が訪ねて来るが、その若者はやはり前述の竹村定之進風であり、その娘の服装は、高く結い上げた髪にかんざしを何本も差した花魁風である。エストニアの“*Jaapani muinasjutte*”（日

<sup>9</sup> Японские народные сказки / [составление и иллюстрации Чёлушкин; перевод В.Марков]. Москва.: Изд-во "Знак", 1994.

<sup>10</sup> *Le grand-père qui faisait fleurir les arbres / conte de la tradition japonaise ; illustré par Anne Buguet.* [Paris] : Pere Castor Flammarion, c2002.

<sup>11</sup> *The shining princess : and other Japanese legends / Eric Quayle ; illustrated by Michael Foreman.* London : Andersen Press, 1989.

<sup>12</sup> *Folk tales of Japan / retold by Sheila Hatherley ; illustrated by Linda Forss.* London : Evans, 1993, c1991.

<sup>13</sup> *The crane wife / retold by Odds Bodkin ; illustrated by Gennady Spirin.* Orlando, Fla. : Harcourt, 2002.

本おとぎばなし)<sup>14</sup>の挿絵も同様に浮世絵の世界である。

浮世絵まではいかないが、全般的に江戸時代の服装が「日本的」ととらえられている傾向がある。男性はサムライであり、女性は高く髷を結い上げた花魁風である。シンデレラの舞台を江戸時代に移した“*Fleur de cendre*” (灰の花)<sup>15</sup>という絵本でお城に招かれた娘たちは、舞踏会もない江戸時代の話なので、座敷に座り込んで話すしかないのだが、二人の姉のいでたちは、なんと精一杯化粧をした花魁姿なのである。

### 着物の不思議

浮世絵の影響を受けた江戸時代の服装もさることながら、日本人が違和感を感じるのは、着物がきちんと着付けられていないことであろう。また着物の裾がドレスのように緩やかに広がっていることも多い。日本の着物が出てくるほとんどの挿絵に言えるのは、着物に対する知識がないことである。20年ほど前に出たイギリスの“*Japan*” (日本)<sup>16</sup>は、子どもたちに各国の歴史、文化を紹介する“*Make it work!*”シリーズの中の1冊である。小学生の子どもが実際に日本の食べ物を作ったり、その当時の服装をしたりしてみるのだが、そのなかで日本の女性の着物はウェディング・ドレスのように後ろが長く、裾を引くようになっている。前は足が見えるくらい短い。

エジプトの“*عروسة حنان*” (ハナーンの人形)<sup>17</sup>は、「世界の女の子はお人形で遊ぶのが好き」という言葉でアメリカ、日本、ロシアの女の子と人形を紹介しているが、花嫁人形らしき人形の着ている着物は、日本の着物でも中国の着物でもない不思議な衣装である。

---

<sup>14</sup> Jaapani muinasjutte / tolkinud Ulle Udam ; pildid joonistanud Silvi Liiva. [Tallin] : Kirjastus Eesti Raamat Ajakirjade Kirjastus, c2006.

<sup>15</sup> *Fleur de Cendre* / Annick Combiere, Anne Romby. Toulouse : Milan jeunesse, c2006.

<sup>16</sup> *Japan* / Andrew Haslam & Clare Doran ; consultant, Heidi Potter. London : Two-Can Pub. in association with Franklin Watts, 1995.

<sup>17</sup> *عروسة حنان* / تأليف ورسم حلمى التونى. [القاهرة] : دار الشروق, 2006.

## 時代考証がない

日本には長い歴史があり、それぞれの時代で服装も違う。まだ日本に対する知識が十分なかった19世紀や20世紀初めに出た本は仕方がないと思うが、今でも、服装や事物が時代を超えて混在している本もある。

1971年に、イギリスで出版された“*The child in the bamboo grove*”（竹林の子ども）<sup>18</sup>には、「何か日本らしきもの」が詰まっている。筋はほぼ竹取物語だが、おばあさんは登場せず、独身のまま年を取った「ヤシド」という男が竹の中から女の子を見つけるのだが、この「ヤシド」は江戸時代の奴のような髭を生やしている。庭で音楽を奏でながら踊っている人々は雅楽の雅人衣装風である。5人の求婚者たちは、強いて言えば、歌舞伎役者風、町人風、大名風、関帝風、毘沙門天風である。帝の着物は暖かい綿入れ丹前と見えないこともない。この本の挿絵画家のエロール・ル・カインは、舞台が日本ではない“*The enchanter's daughter*”（魔法使いの娘）に十二単衣の娘を登場させるなど、自らのイメージを自由に駆使したことで知られている。この“*The child in the bamboo grove*”は、ル・カインにとって時代を超えた日本のイメージということであろうか。

アメリカで出版された“*The girl who loved caterpillars : a twelfth-century tale from Japan*”（芋虫の好きな女の子：12世紀の日本の話）<sup>19</sup>は「堤中納言物語」に収録されている「虫愛ずる姫君」を元にしていて、主人公の姫は辛うじて十二単衣らしきものを着ているが、姫に思いを寄せる相手の中將は、江戸時代の弥次喜多風の旅人の服装、髪型である。

2000年以降出版のものを見ても、フランスの“*La mythologie japonaise*”（日本神話）<sup>20</sup>の表紙は大正時代を思わせる着物を着た男女だが、これが古事記の伊耶那岐命いざなぎのみことと伊耶那美命いざなみのみことなのである。この本では、古事記の登場人物が

<sup>18</sup> *The child in the bamboo grove* / by Rosemary Harris ; illustrated by Errol Le Cain. [London] : Faber and Faber, [1971].

<sup>19</sup> *The girl who loved caterpillars : a twelfth-century tale from Japan* / adapted by Jean Merrill ; illustrated by Floyd Cooper. New York : Philomel Books, c1992.

<sup>20</sup> *La mythologie japonaise* / Claude Helft ; illustrations de Karine Le Pabic. Arles : Actes Sud, c2003.

全て大正時代の髪型、服装で描かれている。インドの“*Japanese folk tales : the snow maiden and other stories*”（日本民話：雪女ほか）<sup>21</sup>では獵師の「ミノキチ」とその父親は飛鳥時代の兵士というような兜をかぶり、弓を持って山へ出かけていく。アメリカの“*Kazunomiya : prisoner of heaven*”（和宮：雲上の囲われ人）は、世界の王女を、その王女の日記という体裁で描いたシリーズの一冊だが、この表紙の奇妙な洋服姿の婦人から和宮を連想できる日本人は皆無であろう。これは日本についての知識を得る場がない、もしくは得ても知識が非常に限られていることからくるものと思われる。

日本の紹介書にも問題がある。2006年に出版されたポーランドの“*Japonia jaka jest*”（日本事情）<sup>22</sup>は古い本の焼き直しなのか内容が古い。日本人が読んでいる新聞がおみくじであったりする。フランスの“*Aoki, Hayo et Kenji vivent au Japon*”（アオキ、ハヨ、ケンジは日本に住んでいる）<sup>23</sup>は日本の三人の子どもが日本を紹介するという形式をとっているが、タイの坊さんが登場したり、囲炉裏のある旅館が紹介されている。日本人としてはやや戸惑う。しかし、同じくフランスの“*Bienvenue au Japon*”（日本ようこそ）<sup>24</sup>で取り上げられている「妖怪」「舞踏（暗黒舞踏）」「珍道具」「猫」「街のファッション」を読むと、その取り上げた事項のオタク的こだわりに関心する。一方で、おなじみのガスパールとリサのシリーズの日本編“*Gaspard et Lisa au Japon*”（日本でのガスパールとリサ）で、ガスパールとリサがシャワー付トイレに驚くというのは、作者の日本体験が反映しているのであろうが、素直に読める。“*Japan by Barbara A. Somervill*”（バーバラ・サマービルの日）<sup>25</sup>になると、表紙の濃い化粧の舞妓にはやや抵抗はあるが、だいたい等身大の現在の

---

<sup>21</sup> *Japanese folk tales : the snow maiden and other stories / retold by Hema Pande ; original illustrations by miss Katayun Saklat ; redone by Kanwar Deep. New Delhi : Rupa, 2003.*

<sup>22</sup> *Japonia jaka jest / Jadwiga Jasny ; ilustrowała Magdalena Jasny. Warszawa : Wydawn. Trio, c2006.*

<sup>23</sup> *Aoki, Hayo et Kenji vivent au Japon / Alexandre Messenger ; illustrations, Sophie Duffet. Paris : De la Martinière jeunesse, c2006.*

<sup>24</sup> *Bienvenue au Japon / illustrations d'Izumi Idoia Zubia et de Sophie Leblanc. Toulouse : Milan, c2009.*

<sup>25</sup> *Japan by Barbara A. Somervill. New York : Childrens Press, 2012.*

日本という感じである。

### 名前でびっくり

民話、昔話の場合、各国とも登場人物の名前はないことが多いが、海外の日本民話にはしばしば登場人物に名前がある。

前述の“*The crane wife*”は鶴を助けた「オサム」のところに、鶴が変身した「ユキコ」がやってくる。また“*The child in the bamboo grove*”のおじいさんは「ヤシド」という名前だったが、これは「嘉蔵」のなまりであろうか。ロシアの日本民話集“*I Aponskie skazki*”（日本のお話）<sup>26</sup>には「ケンゾ」「マサオ」「クラタ」「マサユキ」が登場する。フランスの“*Les deux vies de Taro : d'après un conte populaire du Japon*”（太郎の二つの人生：日本の人気のある話に拠る）<sup>27</sup>は浦島太郎の話だが、太郎には「ミカコ」という妻がいたことになっている。前述の“*The girl who loved caterpillars : a twelfth-century tale from Japan*”の姫は「イズミ」である。

民話や古典から離れた創作となると命名は更に大胆になる。アメリカの“*Sky sweeper*”（空の掃除人）<sup>28</sup>には、お寺で竹箒を使っていつも掃除をしていた主人公が出てくるが、名前は「タケボキ」である。ペルーの“*Kinita la japonesa*”（クニタ、日本の少女）<sup>29</sup>で、クニタは少女の名字ではなく名前である。アメリカの“*The fool and the Phoenix : a tale of old Japan*”（愚か者と鳳凰：古い日本のお話）<sup>30</sup>の主人公は猟師「ヒデオ」であり、村の長は「ノブ」である。

究極の命名は、フランスの“*Le magicien des étoiles : et autres contes*”

<sup>26</sup> *I Aponskie skazki / pereskazal dlia detei Nison Khodza ; narisoval Grigorii Zlatogorov. Moskva : Zakharov, c2006.*

<sup>27</sup> *Les deux vies de Taro : d'après un conte populaire du Japon / texte de Jean-Pierre Kerloc'h ; illustrations d'Élodie Nouhen. Paris : Didier jeunesse, c2003.*

<sup>28</sup> *Sky sweeper / Phillis Gershator ; pictures by Holly Meade. New York Farrar, Straus and Giroux, 2007.*

<sup>29</sup> *Kinita la japonesa. [Lima?] : Impr. en Corporacion Grafica Navarrete, [199-?].*

<sup>30</sup> *The fool and the Phoenix : a tale of old Japan / Deborah Nourse Lattimore. [New York] : HarperCollins, c1997.*

(星の魔術師、ほか)<sup>31</sup>に収録されている「桃太郎」の話で、おじいさんが「ヒト」、おばあさんが「ヒミコ」、同じくフランスの“*The emperor’s plum tree*” (皇帝の梅の木)<sup>32</sup>では主人公の絵師が「ウキヨ」、妻が「タンカ」、息子が「ムスコ」である。

日本文化研究が深まった結果の命名としてはアメリカの“*Shibumi and the kitemaker*” (シブミと凧職人)<sup>33</sup>の主人公である皇帝の娘の名前「シブミ」(渋味?)であろう。同じく“*Wabi Sabi*” (ワビサビ)<sup>34</sup>の主人公の猫の名前は「ワビサビ」(侘び寂び?)であり、この猫は自分の名前の意味を極めるべく、様々な場所に出かけて行く。

### 日本民話の変化? それとも創作?

一般的に言って民話は語り継がれて次々に変化していくし、類話も多い。しかし、外国に行って変化し過ぎたのではという話もある。前述の“*The crane wife*”では、鶴を助けた「オサム」は帆船職人で、「ユキコ」が織るのは帆である。帆船の帆はかなり大きなイメージがあるが、機織り台で織れるものなのだろうか。パレスチナの“*الحب أو السؤال : من التراث الشعبي الياباني*” (愛か問いか: 日本民話から)<sup>35</sup>は、魚を助けた漁師のもとに若い娘が訪ねてくる。浦島太郎と鶴の恩返し合体したような話だが、最後に娘が「愛か問いか」という言葉を残して去って行く。ロシアの日本民話集にしばしば登場するのは“*К э н з о – победитель*” (勝利者ケンゾ)である。海辺に住む貧しい漁師ケンゾのもとに老人が一夜の宿を乞う。夕食を食べて眠るが、老人が寒くて死にそうだということで、ケンゾは自分の船を壊して薪にして老人に暖を提供する(「鉢の木」のもじりか?)。元気を取り戻したこの老人が「お前の望みはなにか?」

<sup>31</sup> Le magicien des étoiles : et autres contes / une sélection de contes écrits par Christine Hanon ... [et al.] ; illustrés par Yasuyuki Hamamoto. [Paris] : Bayard jeunesse, c2008.

<sup>32</sup> The emperor’s plum tree / by Michelle Nikly ; translated from the French by Elizabeth Shub. Greenwillow Books, 1982.

<sup>33</sup> Shibumi and the kitemaker / story and pictures by Mercer Mayer. New York : Marshall Cavendish, 2003.

<sup>34</sup> Wabi Sabi / Mark Reibstein ; art by Ed Young. New York : Little Brown and Co., 2008.

<sup>35</sup> *الحب أو السؤال : من التراث الشعبي الياباني / رسم فنانيين من فلسطين. رام الله : مؤسسة تامل للتعليم المجتمعي, 2004.*

と言うと、ケンゾは「すべての日本人が智慧、健康、富、誠実さ、勇気、知識、喜びを持つようになることを望みます」と答える。老人は、青い龍がいる黄金の丘にそれがあると答え、ケンゾにそこに行くように言う。様々な人に助けられながら、ケンゾは黄金の丘で龍と死闘を演じ、最後に智慧、健康、富、誠実さ、勇気、知識、喜びの詰まった箱を開け、日本人がそれを持つようになるという話である。これは自らの犠牲になることもいとわず、皆の幸せのために頑張ったケンゾによるものである。しかし、この話はソ連時代の創作の匂いがする。民話に「すべての日本人」という言葉が出てくるのか疑問である。

筋自体の変化はないが、挿絵に驚かされることもある。前述の“*Les deux vies de Taro : d'après un conte populaire du Japon*”では、長い時を経て故郷に帰った浦島太郎の前に、日本語のカタカナで、「レストラン」「レコード店」「スーパーマーケット」と書かれた看板が乱立する。このカタカナが読めてしまう日本人は、確かに時代が変わったのだと実感できるが、出版国のフランスではどう理解されるのだろうか。

## 日本を舞台にした創作

日本を舞台にした創作で代表的なのは忍者物である。1980年代にアメリカで大ヒットしたアニメ「ティーンエイジ・ミュータント・ニンジャ・タートルズ」(*Teenage Mutant Ninja Turtles*)から続いている人気なのか、現在は、戦国時代とおぼしき時代に、「センセイ」に鍛えられたサムライ・キッズと忍者部隊が協力して頑張るというアメリカの“*Owl ninja*” (フクロウ忍者)<sup>36</sup>などのサムライ・キッズシリーズが人気である。同じくアメリカの“*Blood ninja*” (鮮血忍者)<sup>37</sup>もある。ほかに女の子が忍者として活躍するシリーズもある。

サムライもまた憧れの的で、猫になってまでも登場するのがアメリカの“*Three samurai cats : a story from Japan*” (三匹のサムライ猫：日本の

<sup>36</sup> Owl ninja / Sandy Fussell. Somerville, Mass. : Candlewick Press, 2011.

<sup>37</sup> Blood ninja / Nick Lake. New York : Simon & Schuster BFYR, c2009.

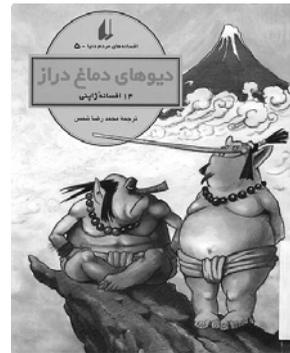
お話)<sup>38</sup>で、サムライ猫が「猫老師」の知恵を借りて、鼠に乗っ取られた城を奪還する話である。忍者物もサムライ物も「先生」が登場するのが特徴である。

その他に、スリで暮らしを立てている金太郎夫妻が、警察長官「オオオカ」氏の赴任に伴い、廃業を考えるとというフランスの“*Ce qui arriva à monsieur et madame Kintaro : un conte du Japon*”（到着したのは金太郎夫妻だった：日本の話）<sup>39</sup>もある。

こうした創作を読んで感じるのは、日本を舞台として「日本人」が活躍するのだが、その人物の個性と心はそれぞれの国の人そのものだということである。

### 現地化した日本の児童書？

日本についての本ではないが、日本の本が海外で訳された場合、それぞれの国で挿絵画家が変えられることがよくある。装丁も含めて雰囲気が変わってしまう例もある。ロシアの民話「おおきなかぶ」が日本に来て、かぶの色が白くなってしまったようなものだろうか（ロシアの絵本ではかぶは黄色である）。日本のアニメが外国で親しまれているのはよく知られているが、イランで出版された「かぐや姫」<sup>40</sup>は、イランの女性のように髪を



「鼻の長い鬼：14の日本の伝説」

覆うチャドルを着けているし、同じシリーズの「一寸法師」のお姫さまも同様にチャドルを着けている。現地化の一例であろう。しかし、別の日本民話集<sup>41</sup>に登場する鬼は現地化されないまま（?）、相撲の力士風である。しかし、日本では鬼がまわしを付けていることはないから、単になんとなく日本風に見えたということか。

<sup>38</sup> Three samurai cats : a story from Japan / retold by Eric A. Kimmel ; illustrated by Mordicai Gerstein. New York : Holiday House, c2003.

<sup>39</sup> Ce qui arriva à monsieur et madame Kintaro : un conte du Japon / raconté Muriel Bloch ; illustré par Aurélia Fronty. [Paris] : Gallimard jeunesse musique, c2005.

<sup>40</sup> [or 2009 2008] 1387, کتابهای بنفشه، تهران : قديانی، تهران : برگردان سبا بابایی. دخترى که از ماه آمد / از نوشته على آشنا ؛ برگردان سبا بابایی.

<sup>41</sup> [or 1999 1998] 1377، نشر افق، تهران : نشر افق، تهران : ترجمه محمد رضا شمس.

アメリカで翻訳・出版された手塚治虫『アドルフに告ぐ』<sup>42</sup>の表紙は、パレスチナ・ゲリラとおぼしき人物が銃を持った写真である。この漫画が人種差別とその結果としての戦争を描いていることを強烈に印象付けられる。こうした日本の児童書の外国における変化例についてはまた稿を改めたい。

## 終わりに

いささか極端な図書ばかり挙げたと思われるかもしれないが、日本以外の国の人々にとってはこの奇妙さは分からないのかもしれない。前述の日本についてのなんだかヘンな本の小展示の際に、外国人の図書館員が「こんなに日本についての本がある！紹介しなくては」とメモを取り始めたのに冷や汗をかいたことがあった。しかし、日本で出ている外国紹介や外国の絵本や児童書はこうした奇妙さとは無縁なのだろうか？その国の人が見たらびっくりするような本があるのではないか？世界が狭くなったとはいえ、相互理解はなかなか難しい。

(さかい きみこ 元・資料情報課書誌情報係)

---

<sup>42</sup> Adolf : 1945 and all that remains / story & art by Osamu Tezuka ; [translation, Yuji Oniki]. San Francisco, Calif. : Cadence Books, c1996.

# 『子どもの本は世界の架け橋』 —ミュンヘン国際児童図書館研修報告—

中野 怜奈

ミュンヘン国際児童図書館<sup>1</sup>は、ユダヤ系ドイツ人のイェラ・レップマンが、戦争で荒廃したドイツの子どもたちのために、20か国から本を送ってもらい、国際児童図書館展を開催したことが契機となり、1949年に設立された。現在は、ブルーテンブルクという名の古城に130言語約60万冊を所蔵し、世界最大規模の児童図書館として知られる。

「子どもの本を通しての国際理解」という理念に基づく同館は、ドイツ外務省の援助を受けて、1958年以降、毎年、各国からの奨学金研究生を受け入れている。筆者はその一人として、2012年7月10日から8月21日まで同館に滞在した。「ファンタジーにおける寓意的イメージ」をテーマに調査研究を行う中で、絵本を含む世界中の児童書を一堂に見る機会を得た。また日本語資料のタイトルを英訳するなど、図書館業務の補助に携わったほか、多彩な活動に参加し、見聞を広めることができた。そのいくつかについて以下に記す。



自作を説明するフミエルフスカ氏

## 国を越えて集う作家たち

同館では、教育者・医師・作家として活躍し、自身が院長を務める孤児院の子どもたちと共に、ナチスの強制収容所で命を落としたヤヌシュ・コルチャックに関する絵本原画の企画展示が行われていた。『ブルムカの日記：コルチャック先生と12人の子どもたち』を描いたポーランドの画家のイヴォナ・フミエルフスカ氏は、展示会にあわせて来館した際に、聖人化された姿ではなく、ヒューマニティーを備えた一人の人間としてのコルチャックを描こうとしたと語った。

<sup>1</sup> Internationale Jugendbibliothek

また、7月15日から20日まで、同館では第2回「国際児童・ヤングアダルト文学のためのホワイト・レイブンス・フェスティバル」<sup>2</sup>が開催された。「ホワイト・レイブンス（白いカラス）」は、同館の国際推薦児童図書目録にちなんだ名である。フェスティバルにあたり、国内外から、14人の作家・画家が招かれた。近隣の子どもたちはクラス単位で、毎日同館を訪れて、読み聞かせやワークショップに参加した。

### ドイツの子どもに読み聞かせ

同フェスティバルと近隣の幼稚園で、合わせて2回、日本の絵本の読み聞かせを行った。同館職員の方と選んだ4冊を日本語で読み、必要に応じてドイツ語に通訳していただいた。『もこもここ』（たにかわしゅんたろう さく・もとながさだまさ え）を読んだときは、子どもたちは同じ意味のドイツ語の言葉を口々に教えてくれた後、筆者に続いて日本語を繰り返した。「どんぐりごろちゃん」のわらべうたは、ドングリが左右どちらの手に入っているか当てるものだが、子どもたちは元気よく手を挙げ、何度繰り返してもその度に楽しんでいる様子だった。

### 子どもの本は世界の架け橋

様々な国から集った研究生の仲間や職員の方々と、世界の児童書が並ぶ書架の前で、互いの国の本について語り合い、夜遅くまで議論を交わしたのは、何にも代えがたいひとときとなった。日本の子どもの本を世界に知ってもらい、また世界の児童書を日本の子どもたちに手渡していくことが、今の日本に求められていると感じた。イエラ・レップマンの著書<sup>3</sup>にある通り、子どもの本が世界の架け橋となるよう願っている。



研究生の仲間とトローズドルフ絵本美術館にて（左端筆者）

（なかの れいな 企画協力課非常勤調査員）

<sup>2</sup> White Ravens Festival für Internationale Kinder- und Jugendliteratur

<sup>3</sup> 『子どもの本は世界の架け橋』（イエラ・レップマン著 こぐま社 2002）

## 講演会「東日本大震災と子どもの読書を考える」

平成23年3月11日に発生した東日本大震災の後、被災した子どもたちの読書に対して、これまでにない関心が注がれ、様々な支援活動が行われた。国際子ども図書館ではこれらの活動を通じて、子どもたちの読書を支えるために何が必要かを考える一助とするため、震災発生から間もなく2年を迎えようとする平成25年3月2日（土）に、公益財団法人東京子ども図書館理事長の松岡享子氏、一般社団法人日本国際児童図書評議会（かさいJBBY）会長の村山隆雄氏（当時）、及び玉川大学通信教育部教育学部准教授の河西由美子氏の3名を講師として迎え、講演会「東日本大震災と子どもの読書を考える」を開催した。

### 様々な支援活動

松岡享子氏は、公益財団法人東京子ども図書館（以下、「東京子ども図書館」）の支援活動「3.11からの出発」<sup>1</sup>として、市立図書館が壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市に同県盛岡市の「NPO 法人・うれし野こども図書室」と協力して平成23年11月に開設した、トレーラーハウスによる子ども図書館「ちいさいおうち」による支援を紹介した。図書館で最も必要なのは継続的な人材の確保であるという考えから「ちいさいおうち」の司書を東京子ども図書館の職員に採用したこと、蔵書を失ってしまった図書館の復興のために、現在入手可能な本だけを選んでブックリストを作成したことにも触れた。講演の最後には「ちいさいおうち」が製作された長野県から陸前高田まで牽引されて移動していく様子が、動画で紹介された。



松岡享子氏

<sup>1</sup> 公益財団法人東京子ども図書館  
<http://www.tcl.or.jp/index2.html> (accessed 2013.3.6)



村山隆雄氏

村山隆雄氏は、国際児童図書評議会が困難な状況にある国や地域の子どもの読書を支援しているプロジェクト「危機における子どもたち」の日本における実践として、一般社団法人日本国際児童図書評議会が一般社団法人日本ペンクラブ、一般財団法人日本出版クラブ、一般財団法人出版文化産業振興財団と共同で呼びかけている「子どもたちへくあしたの本>プロジェクト」<sup>2</sup>の活動を紹介した。特に大人と子ども、障害のある子どもと一緒に楽しめるよう絵本、バリアフリー絵本、おもちゃを組み合わせた「だいじょうぶだよセット」、震災、津波、原発事故の三重の被害を受けた福島県南相馬市の仮設住宅集会所に毎月子どもの本を2冊ずつ届ける「野馬追文庫<sup>のまおい</sup>」、陸前高田市に開設された「にじのライブラリー」及び図書館バスによる支援活動がスライドにより紹介された。あわせて繰り返し起こる自然災害について記録し、次代に伝え、備えることの大切さが強調された。

河西由美子氏は、震災発生直後にインターネットで立ち上げた誰でも参加できる「被災地の子どもたちに届けたい本 @ウィキ」<sup>3</sup>による支援、及び自身が宮城県名取市で行った学校図書館の被災調査につ



河西由美子氏



会場の展示

いて報告した。本を送る支援では①現地が必要とされているものを、②新しい本で、③受け入れ態勢を確認してから送る必要があること、学校図書館への支援の視点が図書館界からも、学校からも見落とされがちであり、今後も継続的、組織

<sup>2</sup> 「子どもたちへくあしたの本>プロジェクト」

<http://www.jbby.org/ae/?lang=ja> (accessed 2013.3.6)

<sup>3</sup> 河西由美子. 震災と子ども読書・学校図書館支援. 国際子ども図書館の窓. 12, 2012. 9, p.3-7. <http://www.kodomo.go.jp/about/publications/window.html#anchor12> (accessed 2013.3.6)

的な支援が必要なことなどが話された。

会場では「3.11からの出発」で作成したブックリストと活動を紹介する資料、「子どもたちへくあしたの本>プロジェクト」の紹介パネル、「だいじょうぶだよセット」、及び国際子ども図書館が行っている「学校図書館セット貸出し」の見本を展示し、来場者が直接見たり触れたりできるようにした。このほか、国立国会図書館が行っている「東日本大震災アーカイブ」について大場利康電子情報部電子情報流通課長が報告を行った。

## 復興に向けて

各講師による講演の後は、3名の講師が鼎談の形式で意見を述べ、あわせて参加者からの質問に答える時間とした。

被災後、避難所や仮設住宅での生活が続く過程で、家や生活の拠点以外にくつろげる場所として、支援の取組で開設された図書館が役立ったこと、これらの図書館や、図書館バスなどの様々な支援活動によって手渡される本が、大人にも子どもにも心を癒す糧となったことなども紹介された。

また、各講師の経験から、日頃の人的・組織的ネットワークが支援活動に役立ったことなどが紹介された。さらに公的機関と民間の機関・団体がそれぞれどのように取り組めば支援活動がよりよく機能するのか、といったことについても意見が交わされた。

最後に、子どもに本を手渡す環境の復興にはまだまだ時間がかかること、今後も継続的な支援が必要であることを共通の認識として、講演会は終了した。

参加者からは、「支援の現場の具体的な話が聞けて良かった」、「被災地の状況や必要とされている支援について知ることができた」「経験に基づく貴重な話を伺えた」、といった感想が寄せられ、講師の方々の力量にあずかり、満足度の高い講演会となったと自負している。

なお、講演要旨は国際子ども図書館ホームページに掲載する予定である。

(企画協力課協力係)

# 「セント・ニコラス：世界の子どもたちが集った雑誌」展 西尾 初紀

セント・ニコラスはサンタ・クロースのモデルとも言われている聖人である。この聖人の名を冠した雑誌についての展示会を、平成24年12月4日（火）から翌平成25年2月3日（日）までの2か月間開催した。展示ケース5台、30点程度のミニ展示ではあったが、幸いにも各方面に取り上げられ、会場アンケートでは「満足」との回答が多数寄せられた。実際に読んでみたいと閲覧請求した来場者も見られた。ここでは会場に来られなかった方々のために、展示内容のダイジェストをお届けする。（展示に供した号や資料には、文中下線を引いた。）なお、展示リスト<sup>1</sup>もあわせて御覧いただきたい。

## I 雑誌『セント・ニコラス』とは

雑誌『セント・ニコラス』(*St. Nicholas : Scribner's illustrated magazine for girls and boys*)は1873年にアメリカ有数の出版社スクリブナーズ社から、女性に続く新しい読者層である子どもたちを対象に創刊された。初代編集長に迎えられたのは『銀のスケート靴』(*Hans Brinker or the Silver Skates*)の作者ドッジ (Dodge, Mary Mapes, 1831-1905, 32巻12号に肖像)。西部開拓時代、日曜学校的な宗教色の強い児童雑誌が多い中、タイトルとは裏腹に説教臭を排して子どもの興味や関心に重きを置き、まるで毎年やってくるサンタのように子どもたちに毎月笑顔を届ける雑誌を目指した。

亡くなるまでの30年余り編集長の座に君臨したドッジの跡を継いだクラーク (Clarke, William Fayal, 1855-1937, 53巻2号に肖像)は、過小評価されがちであるが、カラー印刷の導入や読者からの投稿欄を充実させるなど、新機軸の導入に積極的で発行部数の維持に尽力した。

1927年にクラークが引退してからは編集長が次々と交代し、判型を変える(61巻9号)など編集方針も迷走、67巻は思い切ってパズルやぬり絵主体の遊ぶ雑

<sup>1</sup> [http://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/pdf/stnicholas\\_list.pdf](http://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/pdf/stnicholas_list.pdf)

誌に方向転換、70巻（当館未所蔵）で原点回帰に軌道修正したものの、その後あえなく4号で70年にわたる月刊児童雑誌の歴史に幕を下ろした。

『セント・ニコラス』は世界中で購読されただけでなく、イギリス版やフランス版（*St Nicolas: journal illustré pour garçons et filles*）も出版され、アメリカ史上最良の児童雑誌と評価されている。国立国会図書館の前身の一つである帝国図書館でも『セント・ニコラス』を当時購入しており、2002年の国際子ども図書館発足時には、さらに未収部分を補充した。

## Ⅱ 『セント・ニコラス』に寄稿した作家・画家たち

自身が作家であり編集経験も豊富であったドッジは『若草物語』のオルコット（41巻3号にファンに宛てた自筆書簡を掲載）ら、著名な作家に次々と執筆を依頼した。中でもバーネットの『小公子』（13巻6号）は本誌が初出で、挿絵に描かれた主人公セドリックの中性的なファッションは当時流行し、文字どおりお仕着せられた少年たちには嫌な思い出となつたらしい。

『セント・ニコラス』は文章だけでなく挿絵にも重きを置いていたので、そのクオリティも高く、ハワード・パイル（30巻3号）や後に『100まんびきのねこ』で知られるワンダ・ガアグ（52巻5号）らを輩出した。

またイギリスのクリスティーナ・ロセッティ（3巻1号）の寄稿や、アンデルセンの追悼記事（3巻2号）を掲載するなど、国際的な視野を持った編集方針であったことがうかがえる。

## Ⅲ 子ども向けの記事の工夫

読者対象を中上流階級家庭の5、6歳から18歳くらいまでと幅広く設定していたため、幼児向けに大きな文字と挿絵をちりばめたお話（1巻2号）やクイズ（12巻2号）から、社会や科学のノンフィクション記事（2巻1号金星食、2巻2号イガ（衣蛾）の生態）や工作のページ（3巻1号クリスマスプレゼント、32巻1号日曜大工）など内容も多岐にわたった。19世紀末のこの時期、公立学校や公共図書館といった教育施設の整備が進み読者層もさらに拡大、図書館という施設の活動についての記事も掲載されている（41巻4号）。

#### Ⅳ 子どもたちからの投稿

1874年に子どもの投稿欄が設けられ、世界の様々な国の子どもたちから多数の投稿が寄せられた。ほほえましい手書き文字をそのまま掲載した例（2巻8号）や、日本の子どもに教わった折り紙の折り方（41巻6号）、日本の女学生が綴った青山学校（後の青山学院）の紹介（40巻7号）、また投稿に対する各国の子どもからの感想も掲載され、さながら19世紀版ソーシャル・ネットワークである。1899年からは子どもたちの作品発表の場であるご褒美付きの‘St. Nicholas League’が設立され、後にコールデコット賞を受賞するトマス・ハンドホース（40巻8号）や『沈黙の春』を著わすレイチェル・カーソン（45巻11号）ら若き才能たちが、ここを足掛かりにしていた。

#### Ⅴ 『セント・ニコラス』と日本

『セント・ニコラス』で一番多く紹介された国は実は日本であった。お雇い外国人によるレポート（6巻9号）や、左甚五郎の講談（58巻1号）、紀伊国屋文左衛門のサクセス・ストーリー（58巻1号）のほか、草野球をする少年たちの絵（37巻9号）といった日本の子どもの原寸大の生活の紹介がある反面、キモノとセンスを身に着けて日本人を装ったアメリカの少女の不思議な写真（16巻2号）も掲載されている。

社会ノンフィクション記事として掲載された関東大震災のレポート（51巻1号）では、東日本大震災のときと同様に、混乱や暴動が起きなかったことが賞賛されている。その後、満州事変とアジアの勢力図の解説記事が掲載され、やがて日本関係の記事は激減してゆく。

本展示の企画に際し、奈良女子大学文学部の藤井佳子氏、公益財団法人東京子ども図書館の護得久えみ子氏からの多大な御教示を賜わった。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

（にしお はつき 資料情報課長）

# 10周年を迎えた学校図書館セット貸出し

高宮 光江

国際子ども図書館では、学校図書館に対する支援の一環として「学校図書館セット貸出し」を行っている。国際理解をテーマとして、子どもたちが本を通して世界の国や人びとへの理解と共感を深められるよう、世界の国・地域に関する知識の本、昔話や絵本、絵本の原書など、幅広いジャンルの児童書等約50冊をセットにして、全国の学校に貸し出している。

平成14年5月全面開館の後、同年11月から始まった学校図書館セット貸出しは、この10年間で延べ2,199校に利用され、冊数は104,846冊に上る。平成24年で10周年を迎えた事業の今を紹介したい。

## 様々な活用事例

利用校に対して行ったアンケートの回答から、各校ではセットの図書を様々な工夫をこらして活用していることが分かった。

特に授業で活用される事例が増えており、多くの学校で国際理解の視点から、社会科のほか、国語、英語、道徳、音楽などの授業に幅広く利用されている。

姉妹都市との国際交流や姉妹校との留学生交流、修学旅行の事前学習でも活用されて

いる。マレーシアから来日した児童と国際交流するため、授業でセットの本を用いて調べてまとめ、発表し合う、という例もあった。

学校図書館セット貸出しの10年間	
平成14	事業開始、「韓国セット」提供開始
平成15	「北欧セット」提供開始
平成16	「世界を知るセット（小学校低学年向）」提供開始 「カナダ・アメリカセット」提供開始
平成18	「アジアセット」提供開始
平成19	「世界を知るセット（小学校低学年向）」リニューアル 「世界を知るセット（小学校高学年向）」提供開始
平成20	「ヨーロッパセット」提供開始
平成21	「東アジアセット」「東南アジア・南アジアセット」提供開始（「韓国セット」「アジアセット」終了）
平成22	「中東・アフリカセット」提供開始、活用事例の紹介
平成23	「中南米セット」提供開始 東日本大震災の復興支援として、被災地の学校へ貸出し
平成24	「オセアニア・南極・北極セット」提供開始、「読書郵便」開始 「北欧セット」「カナダ・アメリカセット」リニューアル

貸出セットの大きな特徴は「国際理解」のためいろいろな国や地域の言葉で書かれた絵本が入っていることである。言語は違えども同じお話、同じ絵が伝える力を一緒に体験できるように、なるべく日本語と原語の絵本を対で揃えるようにしている。これらの絵本を各学校で工夫して利用する例も多い。ある小



鹿児島県 和泊町立内城小学校

学校では国際理解教育の授業で同じ絵本を使い、ALT（外国語指導助手）の先生は英語で、日本人の先生は日本語でそれぞれ読み聞かせをした。また、中国、韓国、ブラジルなどの原書の手紙を読める子どもが日本語の本と共に

読み比べたり、子ども同士で同じ本をそれぞれの言葉で読んで聞かせるという活用方法もあった。

そのほか、図書委員がセットの本を題材にしたクイズやビンゴを作る、ホームページに掲載しているセットの書名リストを利用して公共図書館で本を揃える、学校図書館での選書に利用する、という例もあった。

平成22年度から、学校の先生や子どもたちがセットを工夫して活用している事例を、国際子ども図書館のホームページやセットに同封するパンフレットで、更新しながら紹介している。

## 東日本大震災被災地への支援

平成23年3月の東日本大震災の発生後、学校図書館セット貸出しを使って何らかの支援ができないかと検討し、現地の教育委員会と調整しながら準備を進めた。そして通常は借受校の負担となっているセットの返送に係る費用を当館が負担し、被災の状況に合わせて必要な学校にセットを届けられるようにした。

岩手県、宮城県、福島県、茨城県の4県で、平成23年度は68校、平成24年度は84校の利用があった。平成25年度も支援を継続している。



被災地の子どもたちへのメッセージ

## 読書郵便

平成23年度から利用校の子どもたちにおすすめの本を紹介した手紙を書いてもらい、それを次の利用校に届ける取組を「読書郵便」として開始した。これは、大分県の大分中学校で、道徳の授業時間を活用して生



大分県 大分中学校



鹿児島県  
知名町立田皆小学校

徒がセットにある図書をそれぞれ読み、本の感想をおすすめメッセージとして寄せてくれたことにヒントを得ている。本と共に受け取った読書郵便を展示した学校もあった。子どもたちがそれらを読んで、またおすすめの手紙を書いていく。読書郵便は次々に、利用する学校へ繋がっている。

## おわりに

この協力事業は読書推進支援活動の一環として、学校図書館と公共図書館の連携のヒントになることを願って始められた。今では全国各地で、それぞれの地域の特性や学習内容に合わせたセットを用意し、学校に貸し出す公共図書館が増えてきている。とはいえ、全国の学校図書館はまだまだ、国際子ども図書館の貸出しを必要としているようである。

平成24年度、学校図書館セット貸出しの10周年を記念して、日本全国の学校に呼びかけ、利用の様子などを写真で送ってもらった。これらはセットの活用事例を紹介する「日本全国セット貸出しの輪」として、パンフレットやホームページに掲載する予定である。

北から南まで日本全国に世界について知る本を届けたい。そして子どもたちに、本を通じて世界をもっと知ってもらいたい。その思いを学校図書館セット貸出しの本と共に詰めて、毎回送り出す。そしてまた戻ってくる時には、アンケートや読書郵便、手紙や写真が届くことを、何よりも楽しみにしている。

(たかみや みつえ 児童サービス課企画推進係)

## 第78回国際図書館連盟（IFLA）年次大会参加報告

### 飛田 由美

「第78回国際図書館連盟（IFLA）年次大会」（以下「年次大会」という。）は、2012年8月11日から18日まで、ムーミンとサンタクロースの国、フィンランドで行われた。フィンランドというと、日本からは遠い北の果ての国という印象があったが、成田からヘルシンキまで9時間ほどの、案外近い国である。筆者は、IFLA 児童ヤングアダルト図書館分科会（以下「YA 分科会」という。）に参加したので、その内容について、以下に紹介する。

#### IFLA 児童ヤングアダルト図書館分科会とは

IFLA とは、1927年に創設された図書館及び情報サービスに関する世界最大の組織である。テーマ別に40以上の分科会があり、世界の図書館に関する様々な課題に取り組んでいる。毎年8月に開催される年次大会には、世界中から2,000人～3,000人ほどの参加者があり、各分科会等が主催するセッションのほか、展示会やイベント等が行われる。YA 分科会では、児童サービスとヤングアダルトサービスに関する各国の図書館の取組や各図書館が抱える課題などを取り上げ、意見交換を行うとともに、図書館員同士の交流を図る場となっている。

#### サテライトミーティング

「子どものための図書館：境界を越える」というテーマで、年次大会に先立ち、YA 分科会のサテライトミーティングが、8月9日・10日の2日間、フィンランドのヨエンスーで開催された。21か国から約100名が参加し、様々な「境界」を取り上げた事例が報告された。セッションの後、ヨエンスーの図書館を訪問する機会に恵まれた。筆者は学校図書館を訪問するコースを選択し、



University of Eastern Finland の付属図書館と The University Teacher Training School at Joensuu を訪問した。The University Teacher Training School at Joensuu では、小学校の学校図書館と中学校の学校図書館を見学することができた。どちらも大変居心地の良い空間となっていたが、特に小学校の学校図書館では、暖炉とソファが配置されていたのが印象深かった。

## IFLA 年次大会

ヘルシンキで行われた年次大会では、YA 分科会の常任委員会とセッション、学校図書館・リソースセンター分科会と共催のオフサイトセッションに参加した。

YA 分科会では主に次の二つのプロジェクトに取り組んでいる。

### 「絵本で世界を知ろう」プロジェクト

子どもたちが絵本を通じて国際理解を深めることができるように、世界各国の図書館員が自国の代表的な絵本を10冊ずつ選んでセットを作り、世界各地で展示会を開催するというプロジェクトで、2010年から開始された。今回の年次大会では、セッションで概要説明が行われたほか、サテライトミーティングが行われたヨエンスーとヘルシンキで展示会を開催し、19か国147冊の絵本を紹介した。日本の委員が発案したプロジェクトだったため、ヘルシンキで展示された資料が当館に寄贈されることになり、16日に展示会が終了した後、日本への送付準備作業を行った。日本に寄贈されたセットは、2013年度に当館で展示会を開催し、その後はアジア諸国と日本国内に展示会貸出しを行うことになっている<sup>1</sup>。展示会のセットはもう1つ作成され、フランス国立図書



<sup>1</sup> 展示会「絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの」を2013年5月9日から6月9日まで開催した。

館に寄贈された。フランスに寄贈されたセットは、アジア以外の世界各国に展示会貸出しを行うことになっている。

### 姉妹図書館プロジェクト

YA 分科会のもう一つのプロジェクトが姉妹図書館プロジェクトである。異なる国の図書館が共通の言語で交流を図るというプロジェクトで、現在、39組の姉妹図書館が成立している。今回の年次大会では、姉妹図書館をテーマとしたセッションが行われ、メールやブログ、フェイスブック等を利用して交流している事例が報告された。国や地域によって課題が違うため、交流により、視野が広がることが期待されているそうだ。日本の図書館にもオファーがあり、フィンランドのセイヨナキ図書館と鎌倉市中央図書館の間で、姉妹図書館の成立に向けて話し合いが行われている。

今回、IFLA 年次大会に初めて参加したが、分科会のプロジェクトを担当したこともあって、各国の委員と交流を図ることができ、筆者にとって貴重な経験となった。

(とびた ゆみ 児童サービス課長)

# 第33回 IBBY 世界大会に参加して

坂田 和光

国際児童図書評議会（International Board on Books for Young People, IBBY）は、児童書に関わる人たちを結ぶ世界的ネットワークである。隔年で開催される世界大会には多くの児童書関係者が集う。筆者は2012年8月23日から26日までロンドンで開催された第33回世界大会に参加した。“Crossing Boundaries: Translations and Migrations”のテーマの下、児童文学の聖地イギリスの、交通の要所ロンドンで開催された大会の一片を紹介する。

## 大会プログラムから

ロンドン大会ならではのプログラムが、英国の歴代の子どものためのローリエット<sup>1</sup>の講演である。現ローリエットのジュリア・ドナルドソン（Julia Donaldson）氏、ローリエット創設を提唱したマイケル・モーパーゴ（Michael Morpurgo）氏、アンソニー・ブラウン（Anthony Browne）氏が開会式で、マイケル・ローゼン（Michael Rosen）氏が大会最終日に講演した。ユーモアに富んだエピソードを披露したモーパーゴ氏、大道芸風な自作の歌を披露し、これも読書への誘いと話したドナルドソン氏、イーストエンドのユダヤ人という自身のバックグラウンドを強調し、多様性への理解の重要性を説いたローゼン氏など、それぞれ聴きごたえのある講演であった。

大会テーマの関係から、ショーン・タン（Shaun Tan）氏など、祖国を離れた経歴を持つ作家の講演や、翻訳そのものをテーマにした講演も充実していたが、筆者が最も感銘を受けたのは、国際アンデルセン賞受賞作家のエイダン・チェンバーズ（Aidan Chambers）氏の講演である。氏は、自分は書いているときは、読者のことや作品の評判は念頭にない、自分は商業的・教育的見地から書いているのではなく芸術として書いていると述べ、盛んな拍手を浴びていた。

小セッションにも興味深いものが多くあった。「ディアスポラ」と題したセッ

---

<sup>1</sup> Children's Laureate, 2001年に創設された、優れた児童作家や絵本画家に授与される称号。

ションでは、世界に離散した民族の求心力についての報告がなされた。中国移民を描いた絵本の分析は、シンガポール国立図書館のシニアライブラリアンがルーティンワークの傍ら行ったものである。

プログラムの一つ「3.11以後の子どもたちのために」と題した東日本大震災の被災地での読書支援活動の報告には、早朝にも関わらず多くの人が集まった。

JBBYの会長(当時)村山隆雄氏、同・障害のある子どもたちのための本の展示会国内実行委員長攪上久

子氏からは「子どもたちへくあしたの本」プロジェクト<sup>2</sup>、すえもりブックス代表末盛千枝子氏からは「3.11絵本プロジェクトいわて」が紹介された。最後に末盛氏が流した、英訳テロップ付きの「花は咲く」の映像は、聴衆の涙を誘っていた。



村山隆雄 JBBY 会長(当時)

### 国際アンデルセン賞<sup>3</sup>、IBBY オナーリスト、朝日国際児童図書普及賞

2012年の国際アンデルセン賞作家賞はアルゼンチンのマリア・テレサ・アンドルット (Maria Teresa Andrutto) 氏、

画家賞はチェコのピーター・シス (Peter Sís) 氏が受賞した。アンドルット氏は、女性差別、貧困など、優れて社会的なテーマの作品を執筆している。シス氏も、『かべ：鉄のカーテンのむこうに育って』のような社会性に富んだ作品を執筆しているほか、『生命



授賞式の様子

の樹：チャールズ・ダーウィンの生涯』のような知識を刺激する作品の著者でもある。戦闘機や宇宙船が吊り下がる科学博物館の展示会場のなかで、授賞式とパーティーが催され、華やいだ雰囲気を堪能した。アンドルット氏の受賞に際しての、同国ゲストの盛り上がりはサッカーのサポーターさながらであった。

<sup>2</sup> JBBY、日本ペンクラブ、日本出版クラブ、出版文化産業振興財団の共催。

<sup>3</sup> IBBY が児童文学に永続的な貢献をした存命の作家と画家に、隔年で授与するもの。作家賞と画家賞の2部門が存在する。

大会では、IBBY オナーリスト<sup>4</sup>、IBBY 朝日国際児童図書普及賞<sup>5</sup>の表彰式も行われた。オナーリストでは、児童文学、絵本、翻訳文学の169作品が表彰され、日本からは、絵本部門に井上洋介氏の『ほうし』、翻訳部門に斎藤倫子氏の『シカゴよりとんでもない町』（リチャード・ベック作）が選ばれた。朝日国際児童図書普及賞は、アルゼンチンの「おばあちゃんの読み聞かせ計画<sup>6</sup>」とカンボジア「SIPAR<sup>7</sup>」が選ばれた。後者は、ポルポト政権を経て、本も読む文化も失われたカンボジアの地での読書普及活動が評価されたものである。

## 大会感想

大会では、気持ちの趣くままに作品を書いているという発言がチェンバース氏以外の作家からもあった。関連するが、参加した作家の作品などを見るにつけ、児童書の世界でも、社会問題がタブー視されることなく扱われているということが強く印象に残った。

また大会では、テーマである翻訳がクローズアップされた。文学は翻訳という媒体を通じて、国際的に伝播される。児童書の場合は、子どもに理解させるために、大幅な意識が施されるだけに、翻訳者の創作性がより強くなる。翻訳家、作家、出版関係者が、翻訳の重要性を再認識したことと思う。

大会で、エイダン・チェンバース氏、マイケル・ローゼン氏、ピーター・シス氏など、国際的に著名な作家の方々と直にお話することができたのは珠玉の体験である。皆さんフレンドリーで、感激ひとしおであった。また、日本の児童書関係者の方々と近しくお話する機会を得た。多くの方とは、帰国後、新たに仕事上のつながりを持つことができ、IBBY 参加の醍醐味を感じた。今後も IBBY 大会で知己を得た方々との一層の連携を模索していきたいと思う。

(さかた かずこう 国際子ども図書館長)

---

<sup>4</sup> 2年に1度、各国で新しく出版された優れた児童文学、絵本、翻訳文学の中から、外国に紹介したい優良作品を IBBY の各国支部が選ぶもの。

<sup>5</sup> 1986年第20回 IBBY 東京大会を記念して朝日新聞主催で創設された。子どもの読書推進活動を行っている2団体が、隔年で選出され、賞金が贈られる。

<sup>6</sup> Abuelas Cuentacuentos : The Grandmother's Storytelling Programme

<sup>7</sup> Soutien à l'Initiative Privée pour l'Aide à la Reconstruction des pays du sud-est asiatique

## 外国からのおもな来訪者

(駐日外国機関からの来訪者を含む)

平成24年4月から平成25年3月までに、外国(駐日外国機関を含む)から国際子ども図書館を訪れた方々の一部を御紹介します。

年月日	来訪者名(敬称略)
平成24年	
7月2日	ジャネット・アッハベルガー(ハンブルク青少年図書館長) バーバラ・リヒター=ヌゴガング(東京ドイツ文化センター図書館長)
7月10日	ウェナ・アクラタン(タイ教育省基礎教育委員会学務・教育基準局長) 一行12名
8月8日	ウイラワン・サッパンセン(タイ国立図書館長) 一行10名
9月7日	オ・ヘヨン(韓国国立中央図書館資料管理部国家書誌課) キム・ソンミ(韓国国立中央図書館資料管理部国家書誌課) クァク・スヨン(韓国国立中央図書館資料管理部資料運営課)
9月29日	ボンアノン・ニヨムカ・ホリカワ(Thai-BBY 事務局長) 一行12名
10月4日	エイミー・ライアン(ボストン公共図書館長)
11月30日	彭懿 <sup>ホウイ</sup> (児童文学作家、児童文学研究者、浙江師範大学児童文化研究院副 研究員) 周 <sup>シユウリユウバイ</sup> 龍梅(児童文学研究者、翻訳家)
12月4日	ホック・ソティック(カンボジア SIPAR 代表) 一行3名

(企画協力課協力係)

## 連携イベントで広がる世界

浜田久美子

上野公園にある文化施設が互いに連携する動きが活発になるなかで、国際子ども図書館でもここ数年で様々な連携イベントを行ってきた。

国立科学博物館が夏休みに開催する「教員のための博物館の日」への参加もその一つであるが、ここでは、主に子ども向けイベントについて紹介したい。

### 上野動物園の飼育員さんのおはなし

子どもの本には様々な動物が登場し、動物は子どもにとって身近な存在である。そこで、上野動物園と連携して、「秋のおたのしみ会」として絵本の読み聞かせと飼育員さんのおはなしを聞くイベントを平成23年度から実施した。

「おはなしのへや」で30人程度の子どもの対象に、国際子ども図書館の職員が動物の絵本の読み聞かせをし、上野動物園の飼育員さんがパネル写真などをもとに担当の動物の話をする。飼育員さんはゴリラのエサや毛皮、ゾウの牙や歯などを見せながら興味深い話をしてくれた。

4、5歳の小さな子どもが楽しめるようにするには、事前に職員と飼育員さんの間で綿密な打合せが必要だ。「永久歯」「乳歯」の語は難しいので、「大人の歯」「子どもの歯」と言い換えてもらうことや、パネルの写真を見せるだけでなく、説明してもらうよう飼育員さんをお願いした。

参加した子どもは、絵本の読み聞かせて動物の足型を当てるのを楽しんだり、ゴリラのエサとして紹介される野菜や果物を次々と言い当てたり、感想を口々に発言したり楽しんでいる様子だった。

平成24年度には、国際子ども図書館のほか、上野動物園でも開催した。



## まちなかコンサート／東京・春・音楽祭

100人規模のホールで、親子でクラシックコンサートを楽しめるイベントには、東京・春・音楽祭実行委員会との共催で3月に行っている「子どものための絵本と音楽の会『はるるどまほうのくにへ』」と、平成24年度から東京文化会館等との共催で開催した「まちなかコンサート」がある。

上野の春を音楽で祝う「東京・春・音楽祭」は、バイオリンとチェロの演奏を聴きながら、クロケット・ジョンソン作の絵本『はるるどまほうのくにへ』の朗読を楽しむ会である。

絵本選びは国際子ども図書館が担当した。ホールの大型スクリーンに映しても見やすく、また展開が分かりやすい点で『はるるどまほうのくにへ』を選んだ。本の内容に合わせて演奏する曲は、このイベントのために野平多美さんが作曲・編曲したものである。



©ヒダキトモコ

10月に行われた「まちなかコンサート」は、様々な建物にぶらりと立ち寄り音楽を楽しむ趣向である。平成24年度は、開催中の「日本の子どもの文学展」の作家コーナーで宮沢賢治を紹介していることにちなみ、「宮沢賢治と音楽—『日本の子どもの文学』展によせて」と題して行った。「トロイメライ」や「星めぐりの歌」など、宮沢賢治に関連する楽曲などをバイオリンとチェロで演奏し、その後は『セロ弾きのゴーシュ』や楽器の本など、宮沢賢治や音楽に関連する児童書を紹介した。

いずれも、会場の最前列にマットを敷き、専用の子ども席を設けた。参加した子どもは、目の迫力ある演奏に集中して聞き入っていた。演奏後は、興味深く楽器を眺めたり、「子どものへや」で関連の本を見たりする子どももいた。また、保護者からは、小さい子どもと一緒に音楽会に参加できた喜びの声が多く寄せられた。

## 連携の工夫と成果

国際子ども図書館に来る子どもは、小学校低学年やそれ以下が多く、イベントの参加者もそのような年齢が中心となる。ふだんから小さな子どもと接している私たち職員が、子どもたちの楽しめる内容となるよう、積極的に運営に参加していくことが大切である。

連携イベントでは、おはなし会にいつも参加している子どもが動物や音楽という新たな分野に興味を拓くことができると同時に、動物や音楽に興味がある子どもを図書館に呼び込み、本に親しむ機会を提供することができる。

子どもの多様な経験が、様々な本と結び付き、子ども自身の世界を更に広げることができる。図書館の大きな可能性を感じる瞬間であった。

動物園のおはなしや音楽会はこれからも続けていく予定である。是非、足を運んでもらいたい。また、連携イベントで広がる世界を、全国の図書館でも試みてほしい。

\*子ども向けイベントの活動紹介は国際子ども図書館のホームページでも紹介しています。

国際子ども図書館トップページ>子どもの読書活動推進>国際子ども図書館の児童サービス (活動紹介)

<http://www.kodomo.go.jp/promote/activity/index.html>

(はまだ くみこ 前・児童サービス課課長補佐)

## 平成24年4月から平成25年3月までのできごと

平成24年4月から平成25年3月まで、1年間の国際子ども図書館の主要な活動を日付順に配列した（詳細な内容は、pp.61-76「活動報告」参照）。

### 平成24年

---

- 5月5日 子どものためのこどもの日おたのしみ会（6日とも）  
絵本ギャラリー『『幼年画報』掲載作品検索』掲載画像追加
- 5月12日 講演会「読者としての子どもたち—発達と読書、読書の発達—」
- 6月20日 平成24年度国際子ども図書館連絡会議
- 6月23日 子ども国会関連イベント「学んでみよう！日本の政治 世界のきずな」
- 6月30日 講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」第6回「いま、アフリカの子どもの本は？」
- 7月25日 中高生のための「国立国会図書館の仕事」紹介（8月1日とも）
- 7月28日 科学あそび2012（29日とも）
- 7月31日 展示会「世界のバリアフリー絵本展—国際児童図書評議会2011年推薦図書展」（～8月26日）
- 8月21日 文仁親王妃紀子殿下の展示会御鑑賞
- 8月24日 「教員のための博物館の日」（会場：国立科学博物館）に参加（～25日）
- 8月30日 国際子ども図書館調査研究シリーズ第2号『図書館による授業支援サービスの可能性：小中学校社会科での3つの実践研究』刊行
- 9月4日 平成24年度図書館情報学実習生の受入れ（～13日）
- 9月25日 『国際子ども図書館の窓』第12号刊行
- 10月1日 講演会「学習支援における公共図書館と学校図書館の連携を探る」（会場：東京本館）
- 10月6日 展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」関連講演会「天沢退二郎さんに聞く—21世紀の宮沢賢治—」
- 10月14日 子どものための音楽会「宮沢賢治と音楽—『日本の子どもの文学』展によせて—」

- 10月15日 『平成23年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録』刊行
- 10月27日 子どものための秋のおたのしみ会（11月4日とも）
- 10月31日 展示会解説本『日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み』刊行
- 11月5日 平成24年度国際子ども図書館児童文学連続講座「イギリス児童文学の原点と展開：家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語」（～6日）
- 11月20日 第14回図書館総合展に参加（～22日）
- 12月1日 講演会「中国の子どもの読書—作家・<sup>ホウイ</sup>彭懿氏が語る現在」
- 12月4日 展示会「セント・ニコラス：世界の子どもたちが集った雑誌」（～平成25年2月3日）

## 平成25年

---

- 1月5日 電子情報等のプリントアウト料金引き下げ
- 1月26日 「子どものためのおはなし会」体験会（31日とも）
- 2月5日 展示会「子どもの健やかな成長のために2012—厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）の紹介」（～24日）
- 2月20日 児童書総合目録事業運営会議
- 3月2日 講演会「東日本大震災と子どもの読書を考える」
- 3月4日 平成24年度児童サービス協力フォーラム
- 3月24日 子どものための絵本と音楽の会「はるるとまほうのくにへ」

# 活動報告

(平成24年4月～平成25年3月)

## 1. 児童書専門図書館としての活動

### 1.1 資料・情報センターとしての機能

#### (1) 蔵書構築 (所蔵統計は77ページを参照)

国内刊行児童書を納本制度により収集したほか、未収の国内刊行児童書（海野十三の著作等）、外国の児童書（もじゃもじゃペーター関連資料 *Petrol Peter* 等）、国内外の児童書関連資料、児童サービス用資料及び学校図書館セット貸出し用資料の収集を行った。また、主要児童雑誌の欠号等の収集・補充に努めた。

外国の児童書については、欧米や中国、韓国等のほか、外部専門家の収集希望図書リストに基づき平成24年度はラトビアとインドネシアの児童書を重点的に収集した。さらに、外国語資料のより充実した蔵書構築に資するため、ウルドゥー語の児童書等及び英米の児童書・英語圏の児童書関連資料について外部専門家に収集希望図書リストの作成を依頼した。

また、ボローニャ国際児童図書展事務局からボローニャ国際児童図書賞（ボローニャ・ラガッツィ賞）応募作品121冊の寄贈を受けたほか、IFLA（国際図書館連盟）から「絵本で世界を知ろうプロジェクト」により集められた絵本152冊について、貸出用資料として寄贈を受けた。

破損・劣化した資料については、外注により保存容器100個を作成した。また劣化の一因であるホチキスとじ資料について、今年度も資料保存課に依頼し553冊を糸とじに変更した。

#### (2) 情報サービス

##### ○国立国会図書館サーチにおける児童書総合目録の提供

児童書総合目録は、国立国会図書館（国際子ども図書館含む）のほか、国内で児童書を所蔵する主要類縁機関である大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、日本近代文学館、東京都

立多摩図書館、梅花女子大学図書館、白百合女子大学図書館、白百合女子大学児童文化研究センターが所蔵する児童書・関連資料の所蔵情報を一元的に検索できる目録として、平成12年5月から提供してきた。平成24年1月から国立国会図書館サーチ (<http://iss.ndl.go.jp/>) の一機能として提供している。児童書のみを対象とした絞込み検索ができるほか、都道府県立図書館や政令指定都市立図書館蔵書、各種デジタル資料、レファレンス情報などを同時に検索することが可能である。

### ○国立国会図書館蔵書検索・申込システム (NDL-OPAC)

(<https://ndlopac.ndl.go.jp>) への目録データの追加及び児童書専門付加情報の付与

平成24年度は、中国語500件、朝鮮語13件、トルコ語250件の新規受入資料の目録データを追加した。また、平成19年以前に受入れたインドネシア語・マレー語の目録リストから遡及入力を行い、NDL-OPAC での検索を可能とした。

児童書専門付加情報として、日本図書館協会から提供された『選定図書目録』平成22年分の内容解説データ及び日本児童図書出版協会から提供された『児童図書総目録』平成23年分の内容解説データを投入した。また、平成23年及び平成24年に受け入れた新規国内刊行児童書データの一部に件名を付与した。

### ○レファレンス協同データベースへの事例提供

各種図書館からのレファレンスを中心に、レファレンス協同データベース (<http://crd.ndl.go.jp/jp/public/>) へ事例登録を行っており、平成25年3月末現在、292件のレファレンス事例を提供している。

### ○外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報

日本の児童書の海外における翻訳出版情報のデータベースであり、リサーチ・ナビ内で提供している (<http://rnavi.ndl.go.jp/childbook/honyaku.php>)。平成25年3月末現在の収録データは、3,744件である。

### (3) 利用者サービス（統計は78～79ページを参照）

#### ○来館利用サービス

児童書・児童文学に関する調査研究のための第一資料室及び第二資料室には、合わせて約3万冊の参考図書・研究書等を排架するとともに、利用者用端末を14台配備しており、資料検索、書庫資料の閲覧申込み、複写申込書の作成のほか、デジタル化画像などの電子情報の閲覧が可能である。

#### ○遠隔サービス

国際子ども図書館所蔵資料について、遠隔複写申込みや図書館間貸出しの申込みに応じている。また、児童書及び関連資料に関する問い合わせに回答するレファレンスサービスにも応じており、回答した一部の事例は、前述のレファレンス協同データベースで提供している。

### (4) 国会サービス及び行政・司法の各部門に対するサービス

#### ○国会サービス

国際子ども図書館では国会へのサービスとして、国立国会図書館調査及び立法考査局を窓口、資料の閲覧・貸出し・複写・レファレンスなどを行っている。

#### ○行政・司法の各部門に対するサービス

国際子ども図書館では国立国会図書館東京本館・関西館と同様に、各府省庁及び最高裁判所に設置されている支部図書館27館に対して、資料の貸出しなどのサービスを行っている。

## 1.2 調査研究支援

### ○「国際子ども図書館調査研究シリーズ」No.2の刊行

平成24年8月30日、調査研究報告書「国際子ども図書館調査研究シリーズ」の第2号となる『図書館による授業支援サービスの可能性：小中学校社会科での3つの実践研究』を刊行し、関係機関、都道府県教育委員会等に配布すると

ともに、PDF 版をホームページに掲載した。〈68ページ1.3.(3)参照〉

### 1.3 子ども読書活動推進の支援

#### (1) 子どもの読書に関する情報発信の強化及びネットワークの構築

##### ○児童サービス協力フォーラム

都道府県立図書館による児童サービス支援の在り方について、意見交換・相互交流の場を設け、関係者間の連携・協力を促進するため、児童サービス協力フォーラムを開催した。平成24年度のフォーラムは、「ウェブを活用した情報発信～子どもの読書活動の推進に向けて～」をテーマとし、平成25年3月4日（月）に開催した。参加者は75名であった。なお、3か年の予定で平成22年度に開始した本フォーラムは、平成24年度が最終年であった。平成25年度以降は、公共図書館員だけでなく学校図書館員や児童図書出版者など、子ども読書の関係者を広く対象とした「子ども読書連携フォーラム」を開催する予定である。〈本文3～7ページ参照〉

##### ○「子どもの本と図書館の動き」

ホームページの「子どもの本と図書館の動き」で、国内外の主な児童文学賞、子どもの読書と図書館に関するニュース等を紹介している。平成24年度には国内外合わせて85件の情報を掲載した。

##### ○「東日本大震災と子どもの読書についての情報」

平成23年4月1日から「東日本大震災と子どもの読書についての情報」をホームページに掲載し、東日本大震災と子どもの読書に関する情報へのリンク、国や図書館関連団体の動き、被災した子どもたちを支援するための活動等を紹介している。平成24年度には38件の情報を掲載した。

#### (2) 人材育成支援

##### ○児童文学連続講座「イギリス児童文学の原点と展開：家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語」

[平成24年11月5日(月)～6日(火)：受講者46名]

監修：川端有子(日本女子大学家政学部児童学科教授、国立国会図書館客員調査員)

内容、講師：

- ・シャーロット・ヤング『ひなぎく的首飾り』(1856)から始まる系譜  
川端 有子
- ・食から見る「ロビンソン変形譚」の系譜  
水間 千恵(川口短期大学こども学科専任講師)
- ・創作フェアリーテイルの起源と現在  
芦田川 祐子(文教大学文学部英米語英米文学科准教授)
- ・学校物語の伝統からみる「ハリー・ポッター」シリーズ  
菱田 信彦(川村女子学園大学文学部国際英語学科教授)
- ・参考図書紹介 西尾 初紀(国際子ども図書館資料情報課長)

全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員等を対象として、第9回となる標記講座を開催した。当日の配布資料は国際子ども図書館ホームページで公開している。また、本講座の講義録は平成25年度に刊行予定である。

### ○講師の派遣

平成24年4月から平成25年3月までの間に、図書館関係団体等の依頼により、研究会、研修会等の講師として、延べ5名の職員を派遣した。

### ○講演会「読者としての子どもたち—発達と読書、読書の発達—」

講師：秋田 喜代美(東京大学大学院教育研究科教授、教育心理学者)  
宮川 健郎(武蔵野大学教育学部教授、児童文学研究者)

[平成24年5月12日(土)：参加者94名]

宮川氏は自身の研究の経験から、子どもたちの読書や児童文学の受容に関する三つの特徴を挙げた。秋田氏はこれらについて子どもの発達の観点からの知見を述べた。最後に両氏が対談によって意見を交換した。

○講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」(第6回)「いま、アフリカの子どもの本は？」

講師：さくま ゆみこ (翻訳家・青山学院女子短期大学子ども学科教授)

[平成24年6月30日(土)：参加者62名]

さくま氏は、主に英語で書かれたものを中心に、現在アフリカで出版されている児童書、絵本、口承の読み物、昔話などの魅力を紹介した。会場では各国で出版された児童書を展示し、参加者が手に取れるようにした。

○講演会「中国の子どもの読書—作家・彭懿氏が語る現在」

講師：彭<sup>ホウ</sup> 懿<sup>イ</sup> (児童文学作家、児童文学研究者、浙江師範大学児童文化研究院副研究員)

通訳：周<sup>シュウ</sup> 龍<sup>リュウ</sup> 梅<sup>バイ</sup> (児童文学研究者、翻訳家)

[平成24年12月1日(土)：参加者31名]

彭懿氏は現在の中国の子どもたちの読書事情、児童書の出版・流通事情について、自身の経験や調査の結果を、新聞や各種ウェブサイトからの情報を交えて紹介した。中国では近年児童書の出版が非常に多く、優れた本を選んで子どもたちに手渡すための情報が必要とされていること、翻訳絵本を中心に絵本がブームになっていること、日本の絵本や児童文学が多数翻訳出版され、人気を得ていることなどが話された。

○講演会「東日本大震災と子どもの読書を考える」

講師：松岡 享子 (公益財団法人東京子ども図書館理事長)

村山 隆雄 (社団法人日本国際児童図書評議会会長)

河西 由美子 (玉川大学通信教育部教育学部准教授)

報告：大場 利康 (国立国会図書館電子情報部電子情報流通課長)

[平成25年3月2日(土)：参加者67名]

松岡氏、村山氏はそれぞれの組織の取組について、河西氏は、自身が行ったウェブサイトによる支援の取組と学校図書館の被災調査について紹介した。国立国会図書館からは東日本大震災アーカイブの取組について報告し、最後に3

名の講師による鼎談を行った。〈本文40～42ページ参照〉

### ○平成24年度図書館情報学実習生の受入れ

[平成24年9月4日(火)～9月13日(木)：実習生2名]

公募により愛知淑徳大学と同志社大学の実習生を受け入れた。実習生は、カウンター業務、レファレンス・サービス、子どものへやのディスプレイ作成、読み聞かせ等の実習を行った。

### ○「子どものためのおはなし会」体験会

平成21年度から開催している「大人のための『おはなし会』体験会」を、平成24年度は対象を分けて実施した。お父さんお母さんのための会は平成25年1月26日(土)に2回実施し、計50名の参加があった。図書館員のための会は1月31日(木)に実施し、23名の参加があった。図書館員のための会では、おはなし会の後に参加者同士の意見交換も行き、おはなし会を運営する上での工夫や困っていることなどを話し合う機会となった。ホームページの活動紹介に当日のプログラム等を掲載した。

## (3) 学校図書館支援

### ○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援として、「国際理解」をテーマとする児童書等約50冊を「学校図書館セット貸出し」として全国の学校図書館へ貸し出している。セットは、子どもが本を通して世界の国々や人々への理解と共感を深められるよう、世界の国・地域に関する資料や現地で親しまれている昔話や絵本(原書も含む)など、幅広い資料で構成されている。ホームページでは、資料のリストや解題を掲載するとともに、セットを使って学校図書館活動や学習・読書活動を進めた事例を全国から集め、活用事例として紹介している。平成24年度は、延べ265校に計12,350冊の資料を貸し出した。また、平成24年度も引き続き東日本大震災の被災地支援として、被災地域の学校延べ84校に計3,947冊を往復送料無料で貸し出した。〈本文46～48ページ参照〉

## ○学校図書館との連携による学習支援プロジェクト

教科学習に役立つ学習用ブックリストの作成・活用・評価等に関する情報を提供することを通じて、公共図書館と学校・学校図書館との連携協力を促進するため、平成22～23年度にかけて「学校図書館との連携による学習支援プロジェクト」を実施した。平成24年8月に、プロジェクトの成果を『国際子ども図書館調査研究シリーズ』の第2号として刊行した。報告書の刊行を受けて、平成24年10月1日（月）に、東京本館で講演会「学習支援における公共図書館と学校図書館の連携を探る」を開催した。講演会では、職員によるプロジェクト報告の後に、プロジェクト主査の鎌田和宏氏（帝京大学文学部准教授）と糸賀雅児氏（慶應義塾大学文学部教授）の対談を行った。参加者は52名であった。

## 2. 子どもと本のふれあいの場としての活動

### 2.1 子どもの成長段階に応じた館内サービス

子どもが本や図書館にふれあう場「子どものへや」「世界を知るへや」「おはなしのへや」で、子どもと本をつなぐための様々な取組を行っている。

### ○子どものためのおはなし会

毎週土曜日・日曜日の午後2時（4歳～小学1年生を対象）と午後3時（小学2年生以上を対象）にそれぞれ「おはなしのへや」で実施している。職員がストーリーテリングと絵本の読み聞かせを中心に行い、参加者には本のタイトルなどを記したプログラムと「おはなし会カード」（スタンプカード）を配布している。平成24年度は計177回実施し、延べ1,178名が参加した。

### ○ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会

3歳以下の子どもと保護者を対象として、月に2回（第2水曜日と第3土曜日の午前11時から）実施している。職員が絵本の読み聞かせとわらべうたを組み合わせ、その日の参加者の年齢に合わせたプログラムで行っている。平成24年度は合計24回実施し、延べ300組613名が参加した。

## ○夏休み読書キャンペーン

来館者の多い夏休みに、子どもが様々な本に出会えるための企画として、本を読んで問題に答えるクイズを「子どものへや」で実施した。子どもの年齢に応じて、初級編・中級編・上級編の三つの問題を用意し、来室した子どもたちに解いてもらった。延べ約1,200名の子どもが参加した。

## ○中高生のための「国立国会図書館の仕事」紹介

夏休みの7月25日（水）、8月1日（水）に、当館職員による仕事紹介と館内見学を組み合わせた講座を全2回行い、計40名の参加者があった。

## ○科学あそび2012

子どもの科学と科学の本への興味を育てるため、科学あそびを行っている。平成24年度は、7月28日（土）、29日（日）にホールで小学生以上を対象に計2回実施した。科学読み物研究会の坂口美佳子氏を講師に迎え、「たまごの実験～アーチ型の秘密をさぐる～」をテーマに行った。

結果を予想してから実験をして確かめるのが特徴で、アーチ型で強いなどの卵型の特長を、実験を行いながら確認した。職員はアーチ型の強さに関するブックトークをした。小学生を中心に計74名の参加があった。ホームページに活動紹介を掲載した。

## ○子どものおたのしみ会

通常のおはなし会の特別版としておたのしみ会を2回行った。こどもの日の5月5日（土）と翌6日（日）は、1日2回ずつ4回実施し、64名が参加した。秋の読書週間の10月27日（土）、11月4日（日）は、1日1回ずつ2回実施し、51名が参加した。秋のおたのしみ会は上野動物園と連携して行い、当館職員が動物を題材とした絵本を読み聞かせした後、上野動物園の職員がエサや写真を見せながら動物の説明をした。〈本文56～58ページ参照〉

## ○子どものための音楽会

公益財団法人東京都歴史文化財団東京文化会館との共催で、「Music Weeks in TOKYO 2012 まちなかコンサート～芸術の秋、音楽さんぽ～」の一環として10月14日（日）に実施した。「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」展の児童文学者コーナーで取り上げている宮沢賢治に関連した曲を中心に、ヴァイオリンとチェロの生演奏を楽しんだ。また、宮沢賢治や音楽に関する児童書を紹介した。2回実施し、216名の参加があった。＜本文56～58ページ参照＞

## ○子どものための絵本と音楽の会

東京・春・音楽祭実行委員会と共催で、平成25年3月24日（日）に実施した。絵本『はろるどまほうのくにへ』（クロケット・ジョンソン作、岸田衿子訳、文化出版局、1972年）の朗読に合わせて、絵本のイメージで作曲・編曲された音楽をヴァイオリンとチェロの生演奏で楽しんだ。2回実施し、192名の参加があった。＜本文56～58ページ参照＞

## ○子どもの見学

幼稚園・保育園・小中学校、高等学校等、団体向けの見学を行っている。小学生向けには見学とおはなし会を体験するプログラム、中高生向けには職業インタビューを中心とするプログラムでそれぞれ行った。平成24年度は、52件1,014名の参加があった。このほか、夏休み中の火曜日に限り、学校単位でなく、個人単位で参加できる小学生向けツアーを全5回行い、計83名の参加があった。

## 2.2 子ども国会関連イベント

平成24年7月29日（日）、30日（月）に参議院で行われた「2012年子ども国会」の関連イベントとして、6月23日（土）に「学んでみよう！日本の政治 世界のきずな」を開催した。

小学校高学年程度を対象として、国立国会図書館調査及び立法考査局の職員が、政治の仕組みや東日本大震災における国際的な支援などについて説明し、国際子ども図書館職員が理解を深めるのに役立つ本の紹介を行った。33名（子ども17名、大人16名）が参加した。



また、世界を知るへやでは、6月に「きずな～子ども国会関連展示」をテーマとした小展示を実施し、あわせてブックリスト「2012年子ども国会～復興から未来へ～関連資料リスト」をホームページで公開した。

(<http://www.kodomo.go.jp/event/event/event2012-07.html>)

### **2.3 本や読書、図書館に関する情報の発信**

ウェブ上の子どもと本のふれあいの場として平成22年に公開した「国立国会図書館キッズページ」では、「よんでみる？」に知識を広げる児童書の紹介を毎月掲載した。

また、平成24年1月に公開した小学生向けインターフェイスの蔵書検索システム「国際子ども図書館子ども OPAC」については、来館する子どもに使い方を教えたり、雑誌記事などで紹介するなど積極的な広報活動を行った。

## **3. 子どもの本のミュージアムとしての活動**

国際子ども図書館では、子どもの本の持つ魅力を伝えるとともに、子どもと本との出会いの場を提供することを目的として、子どもの本・文化に関する展示会を行っている。

### **3.1 館内展示**

#### **○日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み**

[平成23年2月19日（土）～ 開催中]

(平成24年4月1日～平成25年3月31日 計287日：入場者数60,626人)

国際子ども図書館所蔵資料から、明治から現代に至るまでそれぞれの時代を彩った代表的な日本の児童文学作家・画家の作品を紹介するとともに、子どもが児童文学に接する一つの機会である教科書及び教科書掲載作品、童謡作品を紹介している。また、



著名な児童文学作家のコーナーも設け、半年ごとに入れ替えを行い全体で約270点を展示している。平成24年度に取り上げた作家は以下の通り。

第3回 平成24年2月14日(火)～8月19日(日) 谷川俊太郎

第4回 平成24年8月21日(火)～平成25年2月24日(日) 宮沢賢治

第5回 平成25年2月26日(火)～ 新美南吉

関連催物と開催日、参加者数は以下の通り。

- ・ギャラリートーク(平成24年6月2日(土)・9月8日(土)・平成25年1月26日(土)、参加者60名)
- ・講演会「天沢退二郎さんに聞く—21世紀の宮沢賢治—」(平成24年10月6日(土)、参加者116名)

### ○世界のバリアフリー絵本展—国際児童図書評議会2011年推薦図書展

[平成24年7月31日(火)～8月26日(日) 計23日：入場者数5,924人]

国際児童図書評議会(IBBY)の日本支部である社団法人日本国際児童図書評議会(JBBY)との共催で、障害のある子どもたちも楽しむことができるよう作成されたバリアフリー図書の中から、IBBY 障害児図書資料センターが平成23年に選定した、特に優れた世界18か国の60作品を、手に取って見ることができるよう展示した。

### ○セント・ニコラス：世界の子どもたちが集った雑誌

[平成24年12月4日(火)～平成25年2月3日(日) 計44日：入場者数6,058人]

アメリカで最も優れた児童雑誌と言われた『セント・ニコラス』を、当館所蔵資料から約30点選んで紹介した。<本文43～45ページ参照>

## ○子どもの健やかな成長のために2012—厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）の紹介

[平成25年2月5日（火）～24日（日） 計17日：入場者数2,806人]

厚生労働省雇用均等・児童家庭局との共催で、児童福祉文化財（平成23年度厚生労働省社会保障審議会推薦分）39点の絵本や図書を、手に取って自由に閲覧できる形で展示した。

## ○資料室での小展示

第一資料室と第二資料室では、書架の一部を使用して小展示を行っている。

第一資料室では資料室の研究書を用いた小展示を7回実施した。当館で開催する展示会や講演会に連動したもののほか、当館で作成している調べものに役立つ情報をテーマ別に紹介した「調べ方案内」のガイド展示を行った。

また、一年前に日本の主要な児童図書賞を受賞した作品と、児童サービスの基本資料の小展示を通年で実施している。



第二資料室では外国書を中心とした小展示を9回実施した。当館所蔵の外国の児童書により親しんでもらえるようなテーマを選び、展示資料に解題を付して提供している。

## ○子どものへやでの小展示

子どもが本を手に取りやすいよう、本の表紙を見せて書架に置き、小展示としている。「子どものへや」では季節に合わせたテーマで、「世界を知るへや」



では主に開催中の展示会に関連させて、展示替えをしながら何度訪れても楽しめる工夫をしている。小展示リストはホームページに掲載している。また、ホームページには小展示の活動紹介も掲載した。

## 3.2 電子展示

### ○絵本ギャラリー

「絵本ギャラリー」は、絵本の発祥から20世紀初頭までの発展の流れを、内外の貴重な絵本の画像や音声により紹介する電子展示会コンテンツである。平成24年5月5日に、『幼年画報』掲載作品検索への画像追加を行った。

(<http://www.kodomo.go.jp/gallery/index.html>)

## 4. 内外諸機関との連携・協力、広報活動等

### ○平成24年度国際子ども図書館連絡会議

[平成24年6月20日(水)]

国際子ども図書館の平成23年度の活動について報告し、平成24年度の取組等について国際子ども図書館と協力関係にある諸機関から意見聴取等を行うため、連絡会議を開催した。財団法人大阪国際児童文学館、大阪府立中央図書館、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、独立行政法人国立青少年教育振興機構教育事業部、社団法人全国学校図書館協議会、公益財団法人東京子ども図書館、社団法人読書推進運動協議会、社団法人日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、社団法人日本図書館協会、特定非営利活動法人ブックスタート、文部科学省（生涯学習政策局社会教育課、スポーツ・青少年局、初等中等教育局児童生徒課）の13機関・団体から15名が参加した。会議の後半には、東日本大震災復興支援を含めた各機関・団体の取組について報告を行った。

### ○国立科学博物館「教員のための博物館の日」への参加



平成24年8月24日(金)、25日(土)に国立科学博物館で開催された「教員のための博物館の日2012」に参加した。国際子ども図書館のブースで学校図書館サービス等の事業を紹介したほか、教員を対象に国際子ども図書館見学会を実施した。

## ○図書館総合展への参加

平成24年11月20日（火）から22日（木）まで、第14回図書館総合展に参加し、国立国会図書館の展示ブースでパンフレットやパソコンを用いて様々なサービスを紹介するほか、平成27年に予定している増築棟完成後のサービスについてディスプレイを使ったプレゼンテーションやポスターセッションを実施した。

## ○一般向けの見学

個人向けのガイドツアーを毎週火・木曜日に行っているほか、図書館ボランティア、学校 PTA、学生等の団体向けの見学を行っている。平成24年度は、個人向け99件876名、団体向け33件703名の参加があった。

## ○刊行物（※は国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) に PDF 版を掲載）

- ・『国際子ども図書館の窓』第12号※
- ・『平成23年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「児童文学とことば」』※
- ・『国際子ども図書館調査研究シリーズ第2号「図書館による授業支援サービスの可能性：小中学校社会科での3つの実践研究」』※
- ・展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」展示解説本
- ・展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」小冊子（一般向け（日本語、英語）、子ども向け）
- ・国際子ども図書館パンフレット（日本語、英語）
- ・利用案内：一般向け（日本語、英語、ハンゲル、中国語）、子ども向け（日本語）※
- ・リーフレット「絵本ギャラリー」（日本語、英語）、「明治の煉瓦建築国際子ども図書館」、「たてもの探検」、「学校図書館へのサービスのご案内」、「学校図書館セット貸出し活用事例の紹介—本を読んで世界を知ろう」※
- ・国際子ども図書館メールマガジン

## 5. 施設及びサービスの拡充に向けた準備

平成24年春に着工した増築棟工事は、6月から9月まで埋蔵文化財調査（第二期）を行い、10月から掘削工事を開始した。竣工は平成27年夏の予定である。

増築棟は地上3階、地下2階、建築面積1,100㎡、延べ床面積6,200㎡の規模である。地下1階、2階は約65万冊収蔵の書庫となり、既存棟書庫と合わせて、100万冊以上の収蔵が可能となる。1階には研修室を新設し、子どもの読書に関わる人材の育成支援のための施設とする。2階は、「児童書研究資料室」を設置する。これにより、現在は施設の制約上、第一・第二の二か所に分かれている資料室を統合し、調査研究環境の向上を図る。また、3階には事務室を設置し、執務環境改善による業務効率の向上を図るなど、児童書専門図書館としての機能の充実を図ることとしている。



増築工事後の予想図

また、既存棟については、増築棟に移設する2階の資料室跡地を利用して、図書館を活用した調べ学習のモデルを体験できる「調べものの部屋」、本を手に取って見ることができる展示スペースである「児童書ギャラリー」等を設置し、子どもから大人まで幅広い人が子どもの本の魅力に触れることができる施設として、必要な改修工事を予定している。

増築・改修工事後のサービスの在り方については、平成23年3月に策定した「国際子ども図書館第2次基本計画」に基づき検討を行っている。施設・基本計画については、当館ホームページもあわせて御覧いただきたい。

- ・「国際子ども図書館第2次基本計画」（<http://www.kodomo.go.jp/about/law/basicplan2.html>）
- ・新館建設計画（<http://www.kodomo.go.jp/about/future/design.html>）

# 数字で見る！ 国際子ども図書館

平成24年度（平成24年4月1日～平成25年3月31日）

（1）国際子ども図書館所蔵統計（平成25年3月31日現在）

資料区分				所蔵数	
資料 情報 課	図書 (単位：冊)	日本語	児童書（＊1）	243,206	
			児童書関連書、参考図書	18,156	
			小計	261,362	
		外国語	児童書（＊1）	欧米言語	55,164
				アジア言語	25,446
			児童書関連参考書	4,590	
	小計	85,200			
	計	346,562			
	逐次刊行物 (単位：タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌	1,431
				児童関連誌	795
			外国語	児童雑誌	欧米言語
		アジア言語			27
		児童関連誌		欧米言語	96
			アジア言語	10	
	小計	2,404			
新聞	日本語	12			
	外国語	1			
非図書資料 (＊2) (単位：点)	静止画、紙芝居（＊3）	1,861			
	カード、カルタ（＊3）	199			
	マイクロフィルム	2,076			
	マイクロフィッシュ	35,924			
	録音資料（CD、カセットテープ等）（＊4）	1,954			
	映像資料（ビデオテープ、ビデオディスク等）	6,993			
	電子資料（光ディスク、磁気ディスク等）	6,363			
児童 サービス課	開架閲覧用資料（単位：点）	17,360			
	貸出用資料（単位：点）	6,025			

- ＊1 学校教科書、教師用教科書、学習参考書、楽譜（冊子）、組み合わせ資料を含む
- ＊2 教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のもの数を含む
- ＊3 タイトル数で集計
- ＊4 教師用指導書のみ（児童書音楽資料は未所蔵）

## (2) 来館者統計

開館日(日)	287
来館者(人)	111,919
(うち中学生以下)	(16,639)

## (3) 各室利用統計

第一資料室	開室日(日)	237
	利用者(人)	7,586
第二資料室	開室日(日)	237
	利用者(人)	5,569
子どもの へや・ 世界を知る へや	開室日(日)	287
	利用者(人)	54,592
	(うち中学生以下)	(16,300)
メディア ふれあい コーナー	開室日(日)	287
	利用者(人)	46,880

※本のミュージアムの統計は「活動報告」参照のこと。

## (4) 資料出納統計

国会サービス	点	93
--------	---	----

第一・第二資料室	点	20,367
----------	---	--------

## (5) 複写サービス利用統計

(対象：国会サービス)

紙	件	3
	枚	7
プリント アウト	件	0
	枚	0
マイクロ	件	0
	フィルム(コマ)	0
	フィッシュ(枚)	0

(対象：一般)

紙	件	5,525
	枚	31,339
プリント アウト	件	454
	枚	12,437
マイクロ	件	0
	フィルム(コマ)	0
	フィッシュ(枚)	0

(6) 資料貸出統計

(対象：行政・司法各部門)

相互貸出し	点	31
-------	---	----

(対象：一般)

図書館間貸出し	点	299
学校図書館セット貸出し	件	265
	点	12,350
展示会出品資料貸出し	件	1
	点	1

(7) レファレンスサービス統計

(対象：国会サービス)

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
調査局経由※	処理(件)	1

※「調査局経由」は調査及び立法考査局で受付後、回付されたもの

(対象：行政・司法各部門)

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	3
	処理(件)	4
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0

(対象：一般)

文書回答	処理文書(通)	75
	処理(件)	85
電話回答	受理(件)	1,270
	(うち18歳未満)	(1)
	処理(件)	1,457
口頭回答	(うち18歳未満)	(2)
	受理(件)	8,613
	(うち18歳未満)	(1,390)
	処理(件)	10,921
	(うち18歳未満)	(1,823)

### (8) 参観・見学統計

国会議員 前・元議員		件	0
		人	0
その他の国会関係者		件	0
		人	0
行政・司法		件	1
		人	3
国内	個人	件	99
		人	876
		(うち18歳未満)	(39)
	団体	件	92
		人	1,839
		(うち18歳未満)	(1,137)
	図書館関係者	件	6
		人	47
		(うち18歳未満)	(0)
	地方自治体・地方議会関係者	件	3
		人	24
		(うち18歳未満)	(0)
海外 (外国公館関係者を含む)		件	14
		人	144
		(うち18歳未満)	(0)

### (9) 国際子ども図書館ホームページアクセス統計

http://www.kodomo.go.jp/ 以下の 全コンテンツ	ページビュー(件)	2,437,255
トップページ	トップページのアクセス(件)	330,353

## 国際子ども図書館利用案内

国際子ども図書館ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>

電話 03 (3827) 2053 (代表) 03 (3827) 2069 (録音による利用案内)

☆来館利用 問い合わせ先：企画協力課 ホームページ > 利用案内

どなたでも利用できます。

開館時間 9:30～17:00 資料請求 9:30～16:30 (第一資料室・第二資料室)

休館日 月曜日、国民の祝日・休日 (こどもの日は開館)、年末年始、  
毎月第3水曜日 (資料整理休館日)

休室日 休館日のほか、以下の日が休室日となります。

2階第一資料室・第二資料室：日曜日

3階本のミュージアム：展示会準備等のための休室日

所蔵資料 国内で出版された児童図書・雑誌、外国語の児童図書・雑誌、児童書関連図書・  
雑誌等

※資料の利用は館内のみ。館外への帯出はできません。

☆レファレンス・資料案内 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ > 本・資料を探す

児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせにお答えします。

◆申込方法：来館、文書 (図書館経由)、電話

※資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、及び聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。

☆資料の複写 (有料) 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ > 利用案内 > 複写サービス

◆申込方法：来館、NDL-OPAC 経由 (登録利用者・機関のみ)、郵送 (登録利用者・機関のみ)

☆資料の図書館間貸出し 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ > 利用案内 > 図書館間貸出し

「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみが対象となります。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など貸し出しできない資料もあります。

☆見学・ツアー 問い合わせ先：(一般向け) 企画協力課企画広報係、(児童・生徒向け) 児童サービス課

ホームページ > 利用案内 > 見学・ツアー

☆学校図書館セット貸出し 問い合わせ先：児童サービス課企画推進係

ホームページ > 子どもの読書活動推進 > 学校・学校図書館へのサービス > 学校図書館セット貸出し

「国際理解」をテーマとする児童書約50冊を学校図書館に貸し出します。

※セットに含まれる資料の解題をホームページでご覧いただけます。

---

## 国際子ども図書館の窓 第13号 2013.9

発行所 国立国会図書館 **国際子ども図書館** 2013年9月25日発行  
編集責任者 坂田 和光  
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49  
電 話 03 (3827) 2053 (代表) F A X 03 (3827) 2043  
E-mail info@kodomo.go.jp ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>  
印刷所 株式会社 山越

---

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



# The Window

the journal of the International Library of Children's Literature  
No.013 September 2013

## Contents

<b>【Frontispiece】</b>	
<b>【Foreword】</b> .....	Kazuko Sakata ..... 1
<b>【Research reports】</b>	
Three years at the Cooperation Forum for Children's Services .....	Teruyo Horikawa ..... 3
Recent British children's books : crossover and dark fantasy .....	Hiroko Sasada ..... 8
Urdu children's books : history and today .....	Asuka Murakami ..... 17
Surprising images of Japan in children's books overseas - a note by a former ILCL staff member .....	Kimiko Sakai ..... 27
<b>【Column】</b>	
"A bridge of children's books" : The fellowship program at the International Youth Library.....	Reina Nakano ..... 38
<b>【Highlights】</b>	
Lecture "Great East Japan Earthquake and children's reading activities" .....	Planning and Cooperation Division ..... 40
Exhibition "St. Nicholas - The juvenile magazine that gathered together the children of the world" .....	Hatsuki Nishio ..... 43
The 10th anniversary of ILCL's Book Sets Lending Service to School Libraries .....	Mitsue Takamiya ..... 46
<b>【International exchange】</b>	
The 78th IFLA General Conference.....	Yumi Tobita ..... 49
The 33rd IBBY World Congress .....	Kazuko Sakata ..... 52
The list of foreign visitors and guests .....	Planning and Cooperation Division ..... 55
<b>【Column】</b>	
Expanding horizons through co-organized events.....	Kumiko Hamada ..... 56
<b>【The list of events and activities : April, 2012—March, 2013】</b> .....	59
<b>【ILCL activity report】</b> .....	61
<b>【ILCL in figures】</b> .....	77
<b>【ILCL user guide】</b> .....	81

NATIONAL DIET LIBRARY  
Tokyo

